

レイピア  
ペンダント

清水らくは

rapier pendant

予想通り、一時間も経たないうちにトイレで吐いた。昨日から軽いものしか食べていなかったが、それでも大量の嘔吐物が飛び出てきた。なんとか着物を汚さないようにして、出せるだけ出しきってしまう。

右手の甲に、紅が付いていた。それを見て、また不快感が胸に溢れてくる。今日の僕は、とてもひどい。師匠の買ってくれた着物は、鮮やかなピンクの桜柄のものだった。もし僕が彼女にプレゼントするなら、こういうものを選びたいかもしれない。でも、自分で着るとなると別だ。髪を結いあげられ、顔を塗りたくられ、僕はすっかり女の子に仕立て上げられてしまった。

他の棋戦ならば、スーツでも何でもよかったのだ。けれどもこのタイトル戦は着物店がスポンサーになっていて、対局者が鮮やかな着物姿をお披露目するのが恒例になっている。普段から女の子らしいものを着ていなかったせいで、余計に今回の僕の着物姿をみんなが期待することになってしまった。

小学生の頃、まだ僕の病気を知らなかった両親は、僕のためにいっぱいかわいい洋服を買ってきてくれた。けれども僕はすぐに泥んこになるまで遊んで、それを汚したり破ったりしてしまった。そして、だんだんスカートやひらひらの服を着ることが苦痛になってきて、さらには気持ち悪くなってきた。僕は、女の子じゃない。初めてはっきりとそう言ったとき、両親は目をまん丸くしていた。

大人になるにつれて症状はひどくなっていった。鏡の前で、女装している自分を確認しては泣いた。丸くなっていく体にも、流れ出る血にも泣いた。旅行で、女性部屋で寝なければならないことにもみんなに隠れて泣いた。

泣き続けて、いつからか吐くようになって、そして将棋で負けて、僕は打ちのめされた。女流棋士という肩書を受け入れる時、僕は誓った。絶対にトップになって、一人の棋士として恐れられるようになる。

タイトルを獲れば、その目標に一步近付けるのに。まさか、また「女らしい装い」が敵になるだなんて。

吐き出すものがなくなっても、喉は、心は、嘔吐物を求め続けた。僕は、必死で恐怖を吐き出し続けた。

盤の上に、絵が描かれている。

僕は、それを普通だと思っていた。人と違うと気がついたのは、プロを目指すようになってからだ。

僕は、盤面に広がった模様が、揺れながら動こうとする様を見つめている。その中から一つ駒を動かすと、新しい絵へと描き換えられる。予想していた通りのこともあるし、全く違うものになっていることもある。

僕は局面をとらえられない。動きの中でしか、将棋を理解できない。だから他人の将棋を見ても、よくわからないことが多い。基本的なことには、ついていける。けれども他人の将棋には、「物語」が感じられない。それまでの絵の揺らぎを理解しなければ、次の絵は思い浮かべられない。

登場人物たちの織りなす絵画を、この手で操る。それが僕にとっての将棋の醍醐味だった。そしてその特異な感覚は、小学生のうちはとても役に立った。見た目が女の子ということも相手を緊張させていたのだろうが、なによりも指し手の特異さが相手を惑わしていたらしい。

基本的にはあの頃から変わっていない。見えてしまうものは仕方ない。たとえ他のプロと全く違う方法であろうと、勝利を手に入れられるならば、それでいいと思っている。けれども、僕は何回も負けた。奨励会に入れなかった。女流育成会ですんなりと上がれなかった。今日までタイトル戦に参加できなかった。

女性として生きることだけでも苦痛なのに、女性の中で争うことは本当に心を締め付けられる思いだった。それでもプロへとたどり着くためならばと、必死になってこの世界にしがみついてきた。

今僕の前には、長年女流棋界を引っ張ってきた先輩が座っている。決して順風満帆とはいえなかった道のりを、時には強引に乗り切り、時にはかろやかに飛び越えてきた。何人もの男性棋士に勝ち、テレビにも出て、そしていつもいつも将棋の上達に取り組んできた。僕は三年間その姿を見てきて、本当に尊敬するようになった。彼女がいなければ、女流棋界はただのアシスタント請負業になっていたかもしれない。女性でも将棋に熱心になれることを示してくれたからこそ、僕のような中途半端な存在にも機会が与えられたのだ。

勝負の世界では、勝つことが最大の恩返しだ。僕は今日、最高の絵を描き、最高の物語を紡ぎ出したいと思っている。それだけではプロの世界で生き抜いていけないことは分かっている。定跡、構想力、終盤力、呼吸。さまざまな要素が絡まりあって、「強さ」は形成されている。でも僕には、絵が見えている。これが、僕の将棋。

嘔吐感が喉から下を狂わす中、頭痛にも襲われる。タイトル戦の進行は極端に遅い。長いアマチュア時代を経て女流になった僕にとって、まるまる一日かけて対局を行うのは本当に珍しいことなのだ。座っているだけでも、きつい。相手の方は慣れているのだろう、苦しげな様子は一切見せていない。

今は僕の手番で、指し手も決まっていた。けれども、すぐに着手する気にはなれなかった。ハンカチで口を拭い、コーヒーを口に含んだ。空っぽの胃に、苦い痛みが沁み渡る。

この一手は、流れを変えることになるかもしれない。時間は午後二時。盤を見つめる。喜劇なのか、悲劇なのか。今広がるのは、大きく開けた戦乱の一枚。

駒台から、銀をつまむ。いつもよりも重たい。もしかしたら、名画を台無しにしてしまう一滴かもしれない。それでも、僕は納得する。これが僕にとって、最善の一手だ。

盤に落とされた一枚の駒。波紋を広げて、キャンバスを揺らす。

「おめでとう」

へとへとになった僕を、満面の笑みで迎えてくれた女性。先輩の、要二段だ。僕よりも二つ年上で、とても優しく、とても気さくで、とてもきれいだ。そして、僕の初恋の人。

「疲れました」

「よくやったじゃない」

要さんは、僕の頭をポンポンとたたいた。彼女の中ではまだ僕は子供……女の子なのだ。

「まだ、一勝しただけです」

「私はまだ一勝もしたことないもん。うらやましいなあ」

僕は、なんと言っているのかわからなかった。僕が彼女に唯一勝ること、それは将棋の強さだ。初めて会ったときから、僕の方が強かった。それが彼女の誇りに与える影響を、僕はわかっているつもりだ。けれども彼女は、いつも僕によくしてくれた。きっと僕のことを、妹のように思っている。

僕が両手を挙げると、要さんは小さくうなずいて、帯をほどいた。着付けはすべて彼女にしてもらっている。一枚一枚体を覆っていたものを剥ぎ取られていくとき、僕はできるだけ将棋のことを考える。女の人に肌を見られることは、本当にドキドキする。そして、女の人を肌を想像してしまう。自分の肌も女性のものだから、やっぱり変な感じだ。僕は時折、僕にすらドキドキしてしまう。でも、自分の体については嫌悪感の方が強いから、すぐに鼓動も遅くなる。やっぱり、誰かの肌を見たい。

「桜ちゃん、やっぱりきれいだよね」

突然言われたので、思わず要さんのことを見つめてしまった。大きくて少し茶色い瞳に、見とれてしまう。

「そ、そんなことはないですよ」

「ううん、綺麗。和服も似合ってた。うん」

その優しい瞳は、本音を語っていることを確信させた。僕は耳の裏あたりからこみあげてくる涙を必死で抑えつけた。僕も要さんに、綺麗だよ、と言いたい。けれどもそれはどこまでも本気すぎて、きっと言葉にはいけないのだ。僕は、この体の全てを捨ててしまいたい。そして、男として肌を見せて、女の肌を見せてほしい。

将棋のない時間は、どうしても暗い思いが襲ってきてしまう。僕と二人きりで、平気でいられることを呪う。けれども僕が本当に男だったら、要さんと一緒にいられる時間なんてほとんどないだろう。アマチュアの将棋指しと女流プロとして、何の接点もなく一生を終えていたかもしれない。

ぐるぐると思いが巡る。将棋よりも、難しいことだ。

対局以外の女流棋士の主な仕事に、アシスタントがある。

聞き手をしたり、秒読みをしたり。将棋に詳しいのは当たり前だが、それでも自分からしゃべることはほとんどできない。棋力でいえば棋譜を取っている奨励会員より弱いものだから、こう

いう扱ひも仕方ないのかもしれない、が。

今日の仕事は残酷だった。挑戦者決定戦を特別にCSで中継するということで、急ぎよ人々が集められた。この対局が注目を集めているのは、タイトル戦への挑戦者を決める大事な一番であるから、だけではない。対局者が大ベテラン対新進気鋭の若手だからだ。

上座、中沢九段。これまでに数々のタイトルを獲得し、現在も順位戦ではA級在籍。背筋がピンと伸びていて、対局姿がとても美しい。

下座、川崎五段。プロになって三年目の若手で、今年急成長、現在9連勝中。白くて細くて、それでいてしなやかな筋肉がついていて、競馬の騎手のようだとも言われている。

一部の棋士によって独占されていた感のあるタイトル戦の挑戦の場に登場してきた、過去世代と新世代。今後の将棋界を占うという意味でも、大変な注目を集めることとなった。

そんな対局に、聞き手として立ち会えることは幸運だ。でも、僕にとってこの対局は、もっともっと大切な意味を持っていて、本当は直視したくないものだった。

モニターに映し出される二人は、実に堂々と、それでいて柔らかい姿をしている。午前のゆっくりした流れの中であるということもあるけれど、それ以上に心に落ち着きがあるのがうかがえる。中沢九段はともかく、川崎五段がこれほど普段通りの顔をしているのはさすがだと思った。

彼は、昔からそうだった。いつもいつも、淡々と指して、淡々と勝っていた。

小学生のころライバルと思っていた人が、今、タイトルに挑戦する手前まで来ている。一方の僕は、別室で聞き手をしている。女流タイトル戦に出ているとはいえ、レベルの違いは明らかだった。今僕と彼の間にある溝は、埋めようとすれば笑われるほどに大きい。

解説者はころころと変わる。将棋の中継は案外適当なのだ。指し手もほとんど進まないの、タイトル戦の歴史や現在の将棋界についてのビデオが間に挟まれる。当たり前だが、出てくるのはみんな男だ。男でなくてはいけない、と強く実感させられる。

「木田さんもね、今挑戦してるわけだけど、やっぱり同年代の川崎君が頑張ってる姿は励みになるでしょ」

「そうですね。昔から知っていますし、頑張っていて欲しいです」

こういう場で最初は戸惑って何も話せなかったが、今では適当な受け答えをできるようになった。将棋の強さだけならばアマだって僕より強い人はいるし、見た目やおしゃべりだけならばタレントでもアナウンサーでも頼めばいい。適度に将棋がわかって、適度に視聴者に受け入れられる容姿や口調でという、アシスタントとして求められる女流プロ像は実はとても難しい。

その上僕には、演技しなければならない、という負荷が加わる。女性としての立ち振る舞いを貫き通さなければならない。カメラの前では、家や学校でしてきた以上にうまく演技しなければならないのだ。

対局者の方は、本当に落ち着いている。中沢九段はともかく、川崎五段の堂々とした様子は異常だった。子供の頃はちょこちょこ動く普通の子供だったのに、強くなるのと一緒に順調に大人になっていった。僕よりも、どころじゃない。ほかのどの若手よりもはるか先に行ってしまったかのようだ。

将棋の方は、よくある最新形になっている。角を早目に交換して、中沢九段が飛車を二筋に振っている。それに対して川崎五段は位を三つ取るおおらかな陣形。どちらがベテランかわからないが、若手の研究を頼るのもベテランらしいといえる。終盤の爆発力が売りの中沢九段にとっては、序盤をどれだけ無難に乗り切るかが大事なのだ。その意味で最新形の将棋は参考資料も多いし、川崎五段への対応もはっきり調べできたことだろう。

男性棋戦の将棋は、夕方を過ぎても本格的な戦いにならないことが多い。持ち時間が多いこともあるけれど、一手一手の丁寧さが違う、と感じる。常に最善の手が追及されている緊迫感は、時折僕を震え上がらせる。普段の対局で僕は、何度も悪手を見逃してもらって勝っている。この緊迫感に早く参加しなければならないけれど、いざ身近に感じてみると怖くて仕方がない。

「うーん、これはですね、さっぱりわけがわかりません」

「先生でもそうですか」

解説が年配の先生になって、空気が少し和んだ。解説は強い人がいいとは限らない。しゃべりがうまいとか、いいネタを持っているとか、そういうことも大事だ。対局者二人のエピソードなどをはさみながら進めていかないと、間が持たないということもある。

「ただ、二人とも本気ですね、ええ。なんでかっていうと、いつもよりペットボトルの本数が多いでしょう。まじめに考えるとのどが渇きますからねえ」

「先生ものどが渇くんですか」

「ええ、ええ。でもね、もう私はまじめに考えてもすぐ負かされちゃいますからね、そんなに飲み物はいらないんですよ」

手が進まない雑談ばかりが進む。しかしそんな時も、僕たちは将棋のことを考えている。対局しているのはたった二人だけれど、プロはみな、一つの将棋と向かい合うことができる。局面だけでなく流れそのものを消化し、血肉にしようとする。僕たちは将棋に飢えていて、なかなか満腹にならない。

奨励会の少年が、廊下を走っていく姿が見えた。お使いを頼まれたのだろう。モニターの中では、中沢九段がしきりに扇子を振っている。あれだけ用意されていた飲料水も、すでになくなっていった。少年は追加を買いに行ったのか。

中継がいったん終わり、僕は控室に向かった。解説は入れ替わりだが、聞き手は僕一人なので全く検討に加わる暇がなかった。一度は、その中に身を投じておきたかった。ただうなずいているだけでは、いつまでたっても僕は彼に近付けない気がしていた。

棋士だけでなくマスコミもいて、いつになく控室は人が多く、熱気に溢れていた。継ぎ盤は全て挑戦者決定戦を検討していた。

「あ、桜ちゃん、お疲れ様」

「本当に疲れますよー」

まだ本格的な戦いになっていないからか、それほどぴりぴりした空気にはなっていなかった。形勢は互角だと判断されていて、局面が動き出すのは夕食休憩後ではないかと言われている。

「やっぱり川崎君に勝ってほしいでしょ。でもね、おじさんたちは中沢さん応援しちゃうなあ」

「私は別に、どちらに勝ってほしいとかないですよ」

「そっかあ。じゃあ、やっぱり中沢派の優位は揺るがないね」

「ちょっと、僕たちは川崎組ですからね、川崎君に勝ってもらって、いっぱいおごってもらうんですから」

「川崎君は勝ったらますます真面目になって、飲みになんて行かないんじゃないの」

ぱっと見には、いつもの風景だった。ただ、誰もがどこか、少し緊張していた。今日、この世界にとって大きな意味のある答えが出てしまうかもしれない。歴史が動く瞬間を、これから目撃するかもしれないのだ。

「あっ」

誰かが、間抜けな声を出した。見落としや妙手を発見した時に同じような声が出ることもあるけれど、今はまだそんな局面ではない。

入口に、背の高いひょろりとした男性が立っていた。薄い唇から、小さな声が漏れた。

「どうも」

控室の空気が、一瞬で圧縮された。皆軽く会釈して、目を逸らした。

一番輝いていて、一番静寂なる者。七つあるタイトルのうち、四つを持つ者。天才の国の天才

。

「定家さん」

定家四冠。最大六冠にまで到達し、年間トーナメント全制覇という偉業も達成した。十年間将棋界のトップに君臨し続け、一般人にも最も知られている棋士である。

「そろそろ川崎君が有利になったかと思って来てみたんですが」

固まっていた空気が、さらに凍りついた。天才は、予言を宣言したのだ。皆が期待し、そしてかつてはライバルと呼ばれた男が不利になる姿を確認しに来たのだ。

「いやいや、まだこんな局面でね」

「時間の使い方を見せてください」

四冠は、棋譜のコピーを取り上げた。そして、薄眼で眺め、口元をゆるめた。

「川崎君が、いい時間の使い方をしてますね。調子がいいわけだ」

四冠はこちらに来ると、僕たちの継ぎ盤の横に腰をおろした。

「中沢さんはあと五分くらい考えて、端歩を突くでしょう。それに対して川崎君は三分ほど考えてじっと金を寄る。ええ、検討にも出ていた？　そうですね。ここで中沢さんは長考せざるを得ない。攻めるのか攻めさせるのか決めないといけませんから。かつてのあなたならば迷わず攻めた。けれども今の若手には終盤だけでは勝てませんからね。おそらく飛車を動かさずでしょう。そこで川崎君も長考する。ただし、中沢さんよりも短く。その間に二回は席を外すでしょう。そして、玉を寄る。それがいいですよ、考えたように見せて、玉を寄ってしまう。実は一分でも指せる手を、考えたふりをして指す。それができるようになったから、ここまで来たんですよね」

淡々としているが、どこか呪術的な力を持った言葉に皆は圧倒されていた。それは秘儀として隠されてもいいもののはずなのに、この人はいつも語りつくしてしまう。それでいて、誰も真似をできないのだ。相手の深層心理をわしづかみにできれば、という前提自体が誰にでもできるわ

けではないのだ。

「川崎は……金を寄らないと思います」

「ん？」

思わず、口をはさんでしまった。視線が集中するのがわかる。

「金を寄るような手は、指さないと思います」

「へえ、なんでそう思うの」

「川崎は、そういうタイプの人間ですから」

耳の後ろから、神経が釣りあげられるような感覚がしていた。定家様に口答えする人間など、この世界にはいないのだ。言っていることが当たれば「さすが」だし、当たらなければ「対局者がへぼい」のだ。それなのに僕は、プロ棋士でもない僕は意見してしまった。

モニターの中で、右端の歩が一つ進んだ。

「そうだね、木田さんは川崎君と同じ歳だったものね。昔の彼のことはよく知っているわけだ」

検討陣の声が、半分ぐらいになっていた。皆が次の一手に神経を集中しているのがわかる。四冠と女流棋士、無謀な対戦の結果を、見届けようとしている。

モニターの左上から、白くて細い腕が現れた。たぶん、三分もたっていない。そのことで僕は、賭けに勝ったと思った。手はそのまま右真ん中まで延び、左側の端歩を掴んだ。そして、少しだけ駒を宙に浮かせ、一マス進めて着地させる。後手、9五歩。過激な仕掛けの手だった。検討でもほとんど掘り下げなかった順だ。

「ほう。木田さんの予想通り、なのかな。私の負けだ」

四冠は口を閉じたまま笑い、立ち上がるとそのまま部屋を出て行ってしまった。皆の視線が僕に集中している。僕は、率直な思いを口にした。

「こんな手、全く考えませんでした」

誰かの「ははっ」という声をきっかけに、控室が笑いに包まれた。

夜九時。局面は終盤に入ろうとしていた。

C Sでの中継も再開され、忙しさと緊張感で熱気があふれていた。

端攻めから攻めをつなげようとする川崎五段。その攻めを柔らかくかわし、入玉含みで反撃の機会をうかがう中沢九段。どちらがいいとも言えない、難解な局面が続いていた。

「いやあ、熱戦です。挑決にふわしいですね」

定家四冠も去り、会館からタイトルホルダーが消えた。それでも錚々たるメンバーが残っているのだが、どこか皆不安げだった。あまりにも当たらない検討と、それでいて素晴らしい指し手の数々。コメントするのが怖くてばかばかしくなるような、未知の世界の戦いだった。

「どちらがいいんでしょうか」

「どうなんでしょうねえ。よくわからないですねえ」

解説者も、かつてタイトルに挑んだことがある大先生だ。しかし、明らかに浮ついていて、自分がとてもかなわないことをさらけ出してしまっている。僕などでは到底手の届かないところだ、と思うとひどく悲しかった。

それでも仕事はしっかりとやらなければならない。僕は解説者からいろいろと引き出して、視聴者に情報を提供するお手伝いをしなければならないのだ。

「中沢九段は、入玉などは得意なんですか」

「そうですね、とにかく寄ってそうな玉が逃げていくパターンは多いんですよ。白玉の詰みを人より読んでるんじゃないですかね」

「そうすると、川崎五段としてはかなり慎重に攻める必要がありますね」

「そうは言っても、流れからして元気良く行き続けるんでしょうねえ」

十時過ぎ、川崎の持ち時間がなくなった。ここからは一手に60秒しかかけられない。一分は、本当に短い。相手に持ち時間が残っている時は、なおさらそう感じる。相手が一時間考えていても、トイレに立つことすら緊張する。席を外している間に指されたら、時間が切れてしまう。僕は過去に一度、局面に集中するあまり秒読みの声が聞こえなくなってしまったことがあった。突然「五十五秒」という声が聞こえてきて、あわてて全く考えていなかった手を指してしまい、すぐに敗勢に追い込まれてしまった。将棋のことを考えながら、時間を気にするというのは大変な作業だ。しかも体力的にも最もきつい終盤の局面で、秒読みはやってくる。

「しかし白玉もそんなに固くはないですから。これ以上駒は渡したくないです」

「特に危ない筋というのは」

「端に手をつけているということは、自分も逆襲される危険があるんですね。たとえば9三歩から9四桂などの筋が決め手になってしまうと大変です」

将棋は逆転するゲームだ。形勢もそうだし、攻守もいつ交代するかわからない。「攻防の手」が出ると、すぐに将棋が終わってしまうこともある。今は川崎が一方的に攻めているようでも、受けながら攻める手があれば白玉のことを心配しなくてはならなくなる。

「桂馬を渡さない攻めとなると、どうしたらいいんでしょうか」

「当然歩で攻められれば言うことがないですよ。4六歩のような手が間に合えばいいんですが、強く5七金などとされてどうでしょう。手に乗って逃げられるのが、まずいです。桂馬や香車は渡したくないんですけど、入玉されたら使い道も減りますからね。決め手だと思ったらえいっと打ちつけたいんですよええ」

まさにその時、モニターの中で桂馬が打ちつけられた。先手玉に直接向かっていく、強い攻めの手だった。だが、桂馬は後戻りのできない駒だ。上部に逃げられれば役に立たない上に、取られてしまえば自らを危険に陥れる駒になる。

「決めに行ったと考えていいんですか」

「そうですね」

焦っているのではないかと、心配になった。これまで、若手はタイトルに挑戦することができなかった。若手トップは、強豪に勝つことも珍しくない。けれども、すべての強豪に勝てなければ、挑戦者にはなれないのだ。調子が良ければ対局が増えるが、それだけ負ける数も増える。挑戦者リーグ、早指し戦本戦、敗者復活戦。毎週のように対局がつき、毎週負け続ける時が来ると、若手は明らかに狼狽する。それに対してベテランの先生は、負け方を知っている。負けていいと思ってはいないだろうが、負けたことを受け止める余裕がある。そして一つのチャンスを

つかめたならば、そのことに集中し、さっとタイトルを獲ったりする。

川崎が並の若手強豪なのか、否か。それはこの桂馬の行く末でわかるような気がした。行き場の少ない桂馬が、百戦錬磨の中沢九段をどこまで苦しめているのか。僕には、何もわからなかった。悔しいけれど、二人の闘っている場所は、あまりにも遠かった。モニターの中に、大海原が見える。飛行機から見た時の船のように、駒が番上に小さく浮かんでいる。どこに向かうのか、どのような船なのか、目を凝らしてみてもわからない。いつか、わかる日は来るだろうか。

「ぎりぎりですね。正確な受けがあれば大変ですよ」

祈るような気持で、攻めきってほしいと思った。それは川崎に対する応援の気持ちというよりは、川崎よりも強い人が、できるだけ少なくあってほしいというわがままな気持から来るものだった。川崎を目指すことが、頂点を目指すことであってほしい。

駒を動かしながら解説している途中に、桂馬がぼとりと落ちた。マグネットでくつつくタイプなので、ままあることだ。それでも、僕と解説者の先生は一瞬顔を見合わせ、同時にモニターを見た。当然、モニターの中の桂馬は盤上にしっかりとある。けれども、中沢九段の王は、するりと桂馬の射程距離から逃げていた。それは解説にもあった手だったが、あまり有力ではないと言われていた。「含み」がないのだ。ただ逃げるだけの手に対しては、逃げるのを阻止する手を考えればいい。そんなに焦っていると感じたのか。それとも、本当にそれを最善手だと考えたのか。

喋っていることが、自覚できなくなった。僕は、ルールを知らないスポーツを見るように、対局の流れを傍観していた。ただ、ひいきの選手を見つけて、眺めている。

「これは、決まりましたね」

川崎の玉が、香車の上に乗かった。事前に当たりを避ける、手筋の一着。突然の、受けの一手。それで何が決まったのか、僕にはわからなかった。いつの間にそんな余裕ができていたのか。中沢九段も秒読みに入っていた。

そして、次の手が指されることはなかった。

ちゃんと見てみれば、確かに形勢は傾いていた。玉の早逃げにより、駒を渡さずに攻める手はないし、駒を温存されては入玉するのも難しそうだ。あの桂馬は今では遊び駒になっているが、中沢九段に誤った道を進ませるきっかけを作ったような気がする。

放送時間の限界が近づいていた。僕たちは何となくまとめるような話をして、そして締め言葉告げた。

「いやねえ、はい、楽しみな七番勝負になりますね」

「そうですね」

地下鉄が怖かった。

初めて東京に出てきたとき、僕は盛大に迷った。地下鉄の駅がどこにあるのか分からず、手当たり次第に階段を下りては、また登った。視界があまりにも悪すぎて、そのくせ上下はどこまでも階層があって、僕は目を回した。

家を決める時、地下鉄に乗らなくてもいい場所を選ぼう、あまりビルの高くないところにしようと思ったら、将棋会館からずいぶん遠い所になってしまった。対局の時はともかく、今日のような男性棋戦に関わる仕事の時は、終電の時間にはらはらすることになる。

打ち上げだかお祝いだかもやっているようだったが、僕は対局の後のそういうのに出たことがない。たった一度、自分の挑戦が決まった時にはもちろん出たのだけれど。地元の将棋教室の集まりがあれば、断ることはない。けれど、プロの中に混じるのだけは、だめだ。僕は、女流棋士なのだ。プロたちの会話が、一つ一つ突き刺さるし、それが僕に向けられていないことも僕を傷つける。奨励会の子ですら、僕を相手にしていない。口には出さないが、僕よりも強いことを確信している。

それは、日常の延長だ。でも、そのあと。そのあと終電もなく、東京の街に取り残されたことを考えると、胸がひび割れてしまうのではないかと思う。僕は一人の女性として気遣われ、プロの方々にいろいろと手配してもらおうだろう。桜ちゃんは、弱いだけでなく、かよわい人として見届けられる。辛いだろう。辛すぎるだろう。

部屋に戻るなり、冷蔵庫の扉を開け、ビールを取り出し、一気に飲んだ。アルコールだけが、食道を刺激する。天井を見上げていた。天井より上は、見えないし、想像できない。

上着のボタンを、乱暴に外していった。僕を纏う分厚い鎧を、投げ捨てる。要さんが選んでくれた、クリーム色のポアジャケット。好きな人にもらったからなんとか着ていられたけれど、今日はもうだめだ。本当は全部脱いでしまいたかったけれど、そうすると体が表れてしまう。それも、だめだ。

鞆の中から、携帯の振動する音が聴こえてきた。反射で取り出して、出てしまった。

「あ、良かった。まだ電車かと思った」

声が出なかった。喉が岩のようになってしまっている。

「木田？ひょっとしてまだ乗ってた」

「……い……いや」

何とか絞り出した声は、とっても高くて、細かった。

「そっか。……」

あのさ、本当は、もっと前に言うべきだったんだけど、俺も今日の対局が控えてたから……。まあ、ほんとはさ、お前、先に挑戦者になっただろ。負けてなるものかってさ、意地になって。もっと早くおめでとうって言いたかったけど」

「……」

「木田？」

「……ありがとう。でも、私なんかまだまだだよ」

「そんなことないって。あと一つ勝てばタイトルじゃん。すごいよ」

「……わっ……僕は……そっちに行きたいんだよ」

「え……何？」

「……ううん。こっちこそおめでとう。タイトル獲れよ！」

「おう！……あっ、はい、すぐ戻りますから……じゃ、また今度ゆっくり話そうぜ」

「わかった」

「うん。おやすみ」

「……おやすみなさい」

切れた。

切れそうだった。

決壊した。

涙が胃の奥からあふれ出てくるようだった。

「……先じゃねえよ……全然先じゃねえよ……」

ボアジャケットに埋もれて泣いた。いつまでも泣いた。

テーブルの前に、茶髪の男が座っている。久しぶりの来客だった。

「相変わらずさっぱーけーな部屋だなあ」

「あんたみたいに散らかしてないだけ」

長い手足、広い肩幅、低くて渋い声。同じ親から生まれながら、僕が欲しいパーツを全部持っている人間。

「で、どうしたの」

「ま、簡単にいえば家出した」

「はあ？ 二十歳の男が家出もくそもないでしょ。家探して就職しろ」

「いやいや、あのね。おねーさまを頼ってかわいい弟が来たんですよ。なんかもうちょっと優しい言葉をですわね」

「死ぬ気で頑張れ」

樹にお茶を出し、僕は赤ワインをグラスに注いだ。

「おい、俺にもくれよ」

「お酒は一人前になってから」

「なんちゅーケチ。いい嫁になるよ」

「わざと言っててるよな、それ」

「まーね」

右の頬を張った。それほど強くなかったはずだが、案外大きな音が響き渡った。

「いってー。何すんだよ」

「嫁になんて行かない。死んでも行かない」

「わかったよ。ごめんな。もう言わない」

「よし」

樹ははにかんで、ワインをコップに注いだ。ばかばかしくて何も言えない。

「俺ね、姉ちゃん応援してるんだ。将棋のことは分かんないけどさ、みんなに自慢できるし、ぜってータイトル獲ってほしい」

「突然何」

弟は、一気に、赤い液体を飲みほした。大きなげっぷをする。

「俺、やっぱイラストの学校行くって言って、叱られた」

「え」

「俺も、やっぱ目指したくてさ。独創力ないって言われたけど、下手なわけじゃないし、やれるだけやってみたくて。けど、許してくんないよな、やっぱ」

「ごめん」

「なんで謝るの」

「僕が家を出たから。我儘言って、将棋の道選んだから、樹にはいてほしいんだよ」

「……かもね。けど、一生ってわけにもいかねーだろ。どうせフリーターだし、いっぺんは挑戦してみたいよ」

「……僕は、賛成だよ」

樹は、目を閉じて、口笛を吹いた。

「ちょっと感動したよ」

「僕の時も、賛成してくれただろ」

「姉ちゃん、いい女だ」

「またぶつよ」

「姉ちゃん、体を認めてあげなよ」

樹は鞆の中から、ノートを取り出した。開いて見せたページには、いくつものエアコンの室外機の絵が描かれていた。どれもか細いぐにゃぐにゃした線で、壊れそうなものとして描かれていた。

「気づいたら、描いてる。ほんとはさ、犬とか車とか女の子とか好きだけど、体が勝手に描いてる。俺はこんなの描きたくねーよって不満だけど、体はこれを書きたいんだっていつも不満なのかもしれねーなって、思うことがある」

「……」

「俺、理解はまだしてねーかも。けど、姉ちゃんの心が男であろうとするみたいに、体は女になりたがってるかもしれねーなって、思っ。それが合わさって姉ちゃんなわけで、なんていうかなー、だから男とか女とか超えて、今の目標達成したら、木田桜として成長できるんじゃないかなって、うん、思うんだよ……」

そのまま、テーブルを抱くように、樹は眠ってしまった。昔からお酒には弱かった。

「……生意気言うよね。ほんと……」

心と体。幼いころからの葛藤に、たやすく介入したくない、という気持ちもある。けれども、すごく感謝していた。僕が男の心を持っていることを知っていて、そのことを全面的に受け入れてくれた人。嫉妬することも多いけれど、樹がいることで僕はとても救われている。

今日、ここに来てくれたのは、すごくいいタイミングだった。樹の背中に布団をかぶせ、僕は毛布にくるまった。

自分の立ち位置が、よく分からない。

僕は今日、タイトルをかけて戦う。今女流棋界には僕より若いタイトルホルダーがいるし、僕よりきれいな子もいっぱいいる。それでも新しい動き自体がなかった世界なので、それなりに注目は集めているようだった。

応援してくれる人もいるし、そうじゃない人もいる。

僕は、僕のためだけに将棋を指せばいいと思っている。でも、偽りの女性という後ろめたさは、常に付きまとっている。女性だから、華やかな場にいられる。女性だから、華やかであることを求められる。

心がふわふわしているのがわかる。少し前までは、ここに来ることもちゃんとした目標だったのだ。それなのに、もっと上にたどり着いてしまった人が、僕の心をざわつかせてしまった。

今日は、吐き気がしない。樹に言われて以来、自分の体がとても遠い存在に思っていた。着物を着ているのは、僕とは無関係の体のような気がするのだ。僕がこの体に心を閉ざしているせいで、体も僕のことを認めてくれないのかもしれない。

旅館の空気は、感じたことのないくらい澄み渡っていた。心が勝負を求めているのがわかる。ここで何も考えずゆっくり休めたら、そんなことを考えてしまう。

駒袋からこぼれる、40枚の駒。今日一日、彼らと僕は運命を共にする。これまで何百回と繰り返してきた儀式なのに、違う世界の出来事のように、遠い。

先手の駒が、高く舞い、着地した。カメラのフラッシュが、一瞬世界を消失させる。突かれたのは、飛車先の歩。長年攻める将棋を貫いてきた気概が、そこに込められているように見えた。僕は、すっと角道を開ける歩を突きだした。これは、角換わりになるだろう。女流戦ではなかなか現れない形で、しかも後手が苦しいとされている形。そこに僕は飛び込んでいく。今日の僕は、そうでもしないと目覚める気がしない。

絵が見えない。駒の文字がはっきりと見える。まるで、心までも自分であることを辞めてしまったかのようなようだった。記憶だけが僕の将棋を規定している。

二人の銀が、五筋で向き合った。相腰掛け銀。将棋の、基本中の基本。そして、深く深く深い、底の知れない古典。

昼食休憩を待たずに、駒がぶつかった。流れが速い。飲み込まれてしまいそうだった。

見えない。まだ絵が見えない。

局面はすでに中盤を過ぎようとしている。

すでに前例はない。自分で切り拓いていかなければならないのだ。

覆い被さるような攻めを、ギリギリでかわしていく手順。神経も体力も消耗が激しい。

盤面すらかすんできた。頭の中で、局面を構成する。持ち駒が曖昧になる。

初めて、将棋が怖いと思った。選べる手なんて、実際にはそんなにない。それなのに、選ぶ手によってはもう勝負は終わってしまうのだ。今まで何千局と指してきたはずなのに、初めてこのゲームをしている気になる。

直感なのか読んでいるのか、恐れているのかやけくそなのか、よく分からないままに次の指し手を決めようとしていた。駒台に手を伸ばそうとした時、なぜか僕の右手は盤上をさまよっていた。僕の指は、玉をつまもうとしていた。体と心が、乖離している。必死になって、手を引っ込めた。将棋を指しているのは、僕だ。体はただ、従えばいい。体は、僕ではない……

掌から、駒が滑るように盤へと落ちて行った。なんとか、指せた。そのとき、目の前に絵が浮かび上がってきた。青い花の中、小さな船が沈んでいく絵だった。

悪手だった。

脳が震えているのがわかった。僕の指した手は、受けとしては中途半端だった。一見攻めにも間く攻防の一着のようであり、玉の安全度を高められない中途半端な手になっている。

心が、弱かった。

崩れ落ちていく音がした。

僕はふらふらと、終わらないだけの手を指し続けた。記録係や立会人の先生が何をしているのか、はっきりとわかった。皆の心が第三局へと向いているのが、わかった。

ペットボトルが、その役割を果たせずに一本残っていた。僕はそれを、一気に飲みほした。この対局はもう、生きていない。けれども、勝負はまだ続いていくのだ。天井に向かって、息を吐いた。

嘔吐感が戻ってくる。

化粧台に、化粧品が乗っている。

いつも、そこには雑誌や櫛ぐらいしかない。どうしても必要な時は、引き出しの奥底から取り出していた。

初めて使う、僕を女に仕立てるのではなく、女の僕を仕上げるための化粧。

鏡の中に移る、腫れぼったい眼の女。流しすぎた涙の痕跡を、赤く塗り潰していく。鮮やかに彩られすぎたら、やり直す。こんなに厄介なキャンバスに、毎日みんな取り組んでいるなんて驚きだ。

信じられないほどに、女になっていく。器が、心を覆い隠す。

散々迷った挙句買った、ワインパープルのチェック柄のワンピース。膝上十センチぐらいが出てしまい、スースーする。スカート部分はフリフリになっていて、ヒラヒラしている。

右腕には、昔要さんにもらったブレスレット。波打つようなデザインで、ピカピカと輝く金色。左腕には、小さな文字盤の腕時計。母からもらったお下がりだ。革のバンドは新しく買い替えた。

鏡の中には、まるっきり女の子がいる。あまりにも知らない姿なので、初めての人に会った時

のような気分になる。微笑んでみると、少しドキッとした。女の子の笑顔は、嘘でも作れるのだとわかった。

リボンのついた茶色いバッグを肩から掛ける。これは昨日買った。初めて入った店で、よく分からないので店員に勧められるままに決めた。そしてこれも昨日買った、黒のロングブーツ。ここまで長いと靴というよりも防具のようだが、できるだけ足を隠したかった。しかしここまで履くのに苦勞する靴だとは思わなかった。玄関で何回かしりもちをつきながら、なんとか装着する。

全てが整った。今のところ気分が悪くなることはない。ただ、演じるのだ。木田桜という女性を、演じることに慣れなければいけない。

こういうとき、女の子ならばどんなパスタが似合うのだろう、などと考える。

目の前には川崎。今日は仕事があったらしく、スーツ姿だった。

考えてみると、長い付き合いだけど二人で食事など初めてだった。

「何か……違うね」

先ほどから川崎は、僕の方をチラチラと見ている。もちろん、予想通りの反応だった。

「そう？」

僕は、気づかないふりをしてメニューを見続ける。小さく首を傾げたり、頬杖をついてみたり

「ああ……どう言っているのかわからないけど」

「褒め言葉だと思っとくね」

まずは、成功だ。

「……あのさ、この前はごめんな」

「別に気にしてないよ」

「いや、酔っ払って……あんまり覚えてなくてさ」

「じゃあ、あれは嘘だったのかな？」

「えっ、な、何が？」

「はは。うそうそ、何も言っていないよ」

注文を取りに来た。パスタに付けるドリンクを、紅茶にしてみた。

「もうすぐだよ。みんな注目してるよ」

「木田ももうすぐ決着戦じゃない」

「そうだね」

料理が来るまでの時間は、不思議だ。喋るしかすることがないのに、なかなか本題に入ることができない。遠い昔の思い出などが、ぽつりぽつりと語られる。そのうちに本当に言いたかったことを忘れてしまう。

川崎の注文したものが、先に来た。ミートソースがてかてかと光っている。

「なんか、話題になってたよ。四冠に勝ったって」

「いやあ。川崎があそこで突っ張ってくれたから」

「そりゃ、早く勝ちたいもん」

話し始めたら始めたで、こんなによく喋る人だったっけ、と思う。プロになる前には、僕らはほとんど話す機会がなかった。将棋の大会で会う、顔見知り。感想戦で話すことはあっても、当然中身は将棋についてだけ。そしてたぶん、僕がライバルと思っているほどには、川崎は僕のことを理解していなかった。そう、他の皆と同じように、女の子にしては強いな、というほどにし意識していなかった。

その差は、埋まらなかった。むしろ、開いてしまった。それでも今、二人ともタイトル挑戦者として、目標を持って戦っている。川崎は、それが嬉しいらしい。

「木戸が活躍してたからさ、俺もって」

それが本音だと実感することは、辛い。けれども僕は、演じることに徹しようと思う。そのために、ここまでしているのだ。

「そうね、私も、川崎に負けないようにする」

「あと一つだもんな」

「そうだね」

よく分からない味の Pasta を食べ終わると、紅茶が運ばれてきた。砂糖はどれくらい入れるのがいいのか。

「頑張ろう」

「うん」

ハンカチをバッグから取り出す。白くて花柄の破けてしまいそうな布。口元を拭く。

伝票は、川崎が持っていった。女の子は、それでいいらしい。

小さく手を振って、別れる。川崎の姿が見えなくなってから、大きく息を吐いた。やっぱり、女の子は疲れる。

時折本当に暇な時期がある。

タイトル戦を争っている最中なのに、そのほかの仕事が全くなく、一週間の休暇となっている。もちろんそんな時には将棋の勉強をするのだが、一日中というわけにもいかない。必ず、何か別のことをする。散歩に出たり、買い物に行ったり、ゲームをしたり。将棋以外のことをした後、棋譜並べをする。一度頭の中をニュートラルにしてからでないと、他人の作品を自分の思考から切り離して見るが出来ないのだ。

今日は、自転車に乗ってぶらぶらしていた。目的地はないが、景色を眺めるだけでも気分は和らぐ。ただ、スカートで漕ぐのは、少し恥ずかしい。高校生の頃も、できるだけ長めのスカートを、足にまとわりつかせるようにしていた。

駅前の商店街、少し人が増えたので、自転車を降りた。ふと、一枚のポスターが目に入った。旅行代理店の、ツアーの案内だ。そこには、こう書かれていた。「青い海が、君のことを透明にする」

僕は無意識に自転車を止め、そのポスターにくぎ付けになった。どこまでも青く澄んだ海の中に、水しぶきと、宙に浮かんだTシャツと短パン。海に入って、体が透明になってしまった、という絵。

それは、沖縄だった。僕は旅行などほとんどしたことがなく、沖縄なんて遠い外国のように思っていた。でも、時間とお金があればいけるんだと、気が付く。

僕は店内に入って、順番を待って、そして係のお姉さんに言った。

「あの、ツアーじゃなくて……明日から沖縄に」

思ったほど暑くなかった。那覇空港からモノレール。青い空の下、のろのろと車両が走る。

思ったより一人も多い。それでも多くのカップルもいる。なにくそ、と思う。

飛行機に乗るときわかったのは、旅慣れている人は鞆が違う、ということだった。タイヤのついたキャリーバッグをごろごろとひいている人が多い。僕もいろいろな場所に仕事で行くのだが、いつも高校時代から使っている大きな手提げで移動していた。一泊ぐらいならそれでいい、と思っていたが、今回は三泊の予定。仕方ないので、樹に旅行鞆を借りてきた。黒くて大きくて、ひらひらのワンピースには似合わないカッコいいものだった。

街に入ると、沖縄っぽさは薄れる。建物はどこにでもある、白くて四角いものが多い。

電車を降りると、その思いは一層強まった。日差しも風も、東京とはまるで違う。けれどもまだ、ここは沖縄という感じがしない。脳裏に浮かび上がってくる絵は、本土と同じ絵の具を作っている。

プリントアウトしてきた地図を見るが、ホテルまでの道がなかなかわからなかった。地図の読めない女、という言葉思い出し、意地で目的地を探す。ごちゃごちゃした道を通り抜け、二十分ほどたつてようやくたどり着いた。茶色い建物の、どこにでもあるホテル。

ロビーも部屋も、普通だった。なんとなく、寂しくなってくる。このままいつもの遠征のように終わってしまったら、ぼくはタイトル戦前に何をしているんだろう、と思うことになってし

まう。直観的な行動は、時に果てしない後悔を呼び起こす。

昨日買ったばかりの旅行ガイドブックを眺める。沖縄のことは何も知らず、那覇がどこにあるのかから探さないといけなかった。

今日はもう遅いので、遠くまではいけない。ホテルから出て、国際通りへと向かう。ほとんどは観光客だろう、土産物店や郷土料理店に吸い込まれていく。牙を出して笑うシーサーや、泡盛の小瓶。不思議な文字の書かれたシャツ、銀色の光る三線。

僕が見に来たのは、これらの「証明書」ではない。これらは僕にさらなる色をこびりつかせてくる。それでも折角来たのだから、お土産ぐらい買っていこうと思う。

なんだか、こういうことは慣れない。修学旅行なんかで、仕方なく女子だけで行動するような時。いつも周りのテンションについていけず、気が付くと何も買えていなかった。かといって一人でも寂しいものだ。

棋士になってからも、あまり変わりはない。できるならば僕は、男性棋士たちともっと過ごしたい。けれどもそれも、叶わないことだ。そもそも男として扱ってもらえない以上、男の中に自然に溶け込むのは難しい。その上男の数が圧倒的に多いこの世界では、男性が女流と仲良くすること自体が特別な意味を持つてしまうのだ。もちろん、将棋界内部でどうこうなんてことには興味のない人もいる。けれども将棋一筋でやってきた男性の中には、将棋の世界の女性しか接点を持ってない者もいるのだ。僕にとってはただの友達でも、相手にとっては数少ない関わりを持つて「現実の女の子」になってしまう。もし僕が自分の正体をばらしてしまえば、相手はひどくがっかりするだろう。そしてばらしていない他の人からは、誤解されたまま冷たい目で見られることになるかもしれない。

きっと、これまで川崎と食事にも行ったことがなかったのは、そういうことだ。別にうぬぼれるわけでもなく、若手女流棋士というだけのことで、誰かが僕のことを気にかけている。そして奥手な人が多いこの世界では、よく食事に行く、というだけで確実に怪しまれてしまうのだ。当人ですらもしかしたら、と思うかもしれない。そうなれば、ややこしいことが待っているに決まっている。そう、ややこしいことは、これから起きるかもしれない。

自分のしたことが、全てばかばかしく思えてくる。何故一人でここに来てしまったのだろう。何故女装して会おうと思ったのだろう。何故女流棋士になろうとしたのだろう。何故こんなにも後悔するのに、勝負の世界で生きようとしたのだろう。

「無責任」と書かれたTシャツの前で、しばらく僕は考え込んでいた。1800円のお土産を前に、必死に買うかどうかを悩んでいるように見えたかもしれない。まあいいや。せっかく旅に出たのだから、人目とか気にしても仕方ないのだ。

店を出て、とりあえずぶらぶらと歩く。お腹も減ってきた。食事のためにガイドブックを読みあさる気も起きず、目に着いたアーケードの隙間のようなところにある沖縄そばの店に入った。

「えーと、ソーキそば」

とにかく面倒くさくて、一番目立つメニューを頼んだ。ソーキが何のことかはよく分からない。料理が出てくるまでの間、これじゃいかん、と気合を入れた。せっかくめったにしない旅をしているんだから、もっと積極的に楽しまなくては損だ。

出てきたソーキそばに対して、全神経を集中せる。そして、五分で食べ終わった。おいしかったが、とてもおいしい、とは感じなかった。僕はよく味に鈍感だと言われる。

本番は明日からだ。食事を終え、足早にホテルに戻った。いまのところ、感じるのは寂しさばかりだった。

爽快である。

沖縄を回るのはレンタカーがいいと言われ、ホテルとセットで申し込まされた。普段純然たるペーパードライバーなので、できれば運転は断りたかった。しかしいざ乗ってしまえば楽しいのだ。そして、その自覚があるからこそ乗りたくなかったのだ。

東京の状況を考えれば、沖縄の道は非常に快適だった。国際通りを抜けるまではきつかったものの、市街地を出てしまえば交通量は大したことがない。幸いにも今日は快晴。沖縄には目立つ山もなく、空は広く、海も果てしない。

生まれも育ちも山の中、プロになってからも東京の奥のほうに住んでいる僕にとって、この風景はまぶしすぎる。そういえば、仕事場自体がとっても狭くて、暗いところなのだ。本当に小さな盤上ばかりを見ていたから、こんなに大きな地上は眩しすぎるのだ。「君のことを透明にする」というフレーズが、頭の中で繰り返される。

カーナビに目的地を入れ、これも樹に借りてきたCDをデッキに入れる。何となく、優しいポップスにしてみた。おかげで少しスピードを落とすことができた。

考えてみれば、ドライブなんてものもしたことがない。タイトルが獲れたら、賞金を頭金にして車を買うのも悪くないかもしれない。

前後にもほとんど車がない。最初の目的地である岬まで、快適な走りが楽しめるなあ、と思っていたら。百メートルほど気で、こちらに手を振っている人がいる。ヒッチハイクかと思ったが、反対の手には自転車。白い短パンに黒いTシャツ、一瞬少年かと思ったが、顔を見るとかわいらしい女の子だった。何か困っているのだろうか、僕と目が合うと、必死に訴えかけるようにさらに強く手を振りだした。

何となく無視できなくて、僕は車を止めた。窓を開け、顔を出す。

「どうしたの？」

「あー、よかった！ 自転車パンクしちゃって。みんな無視するしさー」

はきはきとした声の、元気な女の子。まだ高校生ぐらいだろうか。

「どうしたらいい？」

「うーん、自転車屋さんとかあるのかなあ。これレンタルだし、勝手に修理していいのかな」

「観光？」

「うん。今日は」

車から出て、自転車の様子を見る。後輪が何かに引っ掛かったのか、チューブだけでなくタイヤにも亀裂が走っており、とても何とかできる状態ではなかった。

「那覇から来たの？」

「うん。なんかね、朝思いたっちゃって」

「どこ行く予定だった？」

「とりあえず最初は、喜屋武岬」

「私もだよ。一緒に行こうか」

なんとなく、だけれど。普段なら恥ずかしくて女の子なんて誘えないけれど、この子となら大丈夫だと思った。もちろん、旅の雰囲気僕を大胆にさせているということもあるだろう。

「ほんと？ いいの？」

「私もまだ沖縄のことよくわかんないしさ、一緒のほうが楽しいかも」

「やったあ！あたし結構長いしさ、いろいろ話聞ってるから、案内できるよ」

まずは二人で、自転車を後部座席に押し込んだ。ぎりぎりだったが、なんとか収納することができた。

「あ、そうそう。あたしの名前は美鶴。あなたは？」

「さくら。いいね、美鶴って」

「はは。よく男の子と間違えられるけどね」

「ミツル……そうだね」

僕は、贈り物のように現れた彼女に、精一杯ほほ笑んだ。孤独を消し去るうえに、僕の心を刺激するほどではない少女。そして彼女にとっても、僕は安心できる女の子に見えていることだろう。

「さくらって呼んでいい？」

「うん。じゃあ私も美鶴って呼ぶね」

「オッケー。なんか、すごく運が良かった。ありがとう」

僕も運が良かったけれど、それは口に出さないことにした。もし出会ったのが男性だったら、僕は葛藤したかもしれない。もし出会ったのがきれいなタイプの人だったら、僕はためらったかもしれない。

僕は女性の鎧で美鶴のことをだましているのだ。けれども、それでいいじゃないか、と思う。そう思い込む。

サトウキビ畑の中、狭い道を進んでいく。CDを、止めた。

「ひっやー」

美鶴は、叫んだ。

僕の腕ではなかなか大変な道を登って行って、たどり着いた場所。一瞬水色の変な形のモニュメントに目が行くものの、そのあとは遠くまで広がる海に視線は釘つけだった。

「遠い……」

思わず僕の口から洩れたのは、そんな言葉だった。太陽光を反射して、光り輝く海がどこまでも続いている。この先にあるのは、大陸だろうか。そこまでは見えない。

「あれかあ」

美鶴は崖の下のほうを覗き込んでいた。でこぼこの岩に、亀裂が走っているのが見える。

「なんなの？」

「戦争のとき、砲弾が撃ち込まれたんだって」

言われてみると、波に削られたにしては形が角ばっているような気がした。そう、沖縄にはそういう歴史があるのだ。

「なんでこんなところに」

「ここまで逃げてきた人もいたって。でも、海からも攻撃された。飛び込んだ人もいたって、聞いたよ」

美鶴の言葉に、戸惑いを覚える。僕よりも若い女の子が、表層をすっ飛ばして沖縄を見ている気がした。長くいればそうなるのだろうか。

「全然想像つかないね」

「うん。でも、おじいに話聞くと、ちょっと光景が浮かんで来ることがあるよ」

僕には、何も見えてこなかった。この青い海に、赤い血が浮かんだことなど想像できない。戦争など、見えない。

「あ、あたし別に感傷に浸ってるわけじゃないよ。でもね、沖縄来て、あー海きれいーとかっていうのは飽きちゃったからかな。ごめんね、さくらは初めてなんでしょ」

「ううん。私も、色々感じてみたいかも」

将棋のときはあれほど絵が浮かぶのに、美しいものの前では現実しか見えてこない。しかし、盤上は美しくないのか？

ああ、将棋のことを思い出してしまった。

「ねえ、王道のことしてみようよ。さくらもそのつもりだったでしょ」

「え、うん、そうだね。……でも、王道って？」

「うふふ」

なんとなく、笑う美鶴と海とを、写真に収めた。こんなにきれいな海もだが、普通に女の子にレンズを向けるのも、初めてだった。

美鶴の言う王道は、グラスボートだった。船の底がガラスになっていて、魚の泳ぐ姿を見ることが出来る。

「一人だったら来なかったもんね。感謝です」

「確かに……」

私たち以外は全てカップルだった。これは、女一人では乗りにくい。

「なんかね、なかなかきっかけないんだ。那覇にずっといると、沖縄の海のことなんて、忘れちゃいそう」

浅い海の底に、珊瑚や小魚が見える。どちらかと言うと、魚の方が色鮮やかだった。えさが投げ込まれ、海面から飛び出さんばかりに魚たちが跳ねまわる。そして遠くを見れば、澄み渡る青い海。そして、青い空。

「美鶴は、最初っからずっと那覇なの？」

「ちょっとは出かけたけどね。北谷とか、コザとか。でも、永住する予定だったし、仕事見つけなきゃって思って、毎日歩きまわってた。夏になっても海とか見る余裕ないし、友達もなかなか会えないし、あー、これじゃ本土のときと変わんないなー、って思って、自転車で南の方行ってみようって思ったわけ。そしたらパンク。びっくり」

柔らかそうな唇から、明るい声がたくさん溢れ出てきた。海面が光を反射するだけではなく、彼女の顔は輝いていた。それに比べて僕は、ぼんやりと沖縄全てを眺めている。このまま吸い込まれて、透明になりたいのだ。

「あ、そういえば聞いてなかった。さくらって、仕事はなにしてるの？学生じゃないよね」

「え、わかった？」

「なんか、きっちりしてるもん。社会に出てる顔してるし」

「そうかな……」

僕らの職業は世間からは浮いている、と思っている。小学生の頃からプロと同じ屋根の下で競い合い、年齢に関係なく資格を得て、一週間に一回よりも少ない対局を生業としている。中にはゆるみきった人もいるし、会話するのが大変な人もいる。学生でないことは確かだが、社会人として見られるような顔つきをしているかどうかは自分ではわからない。

「うーん、料理とかしてない？中華のイメージかな」

「どっちかっていうと和食かな……料理じゃないけど」

「え、ひょっとして陶芸とか？」

「近い、のかなー。あのね、将棋のプロなんだよ」

三秒ぐらい、美鶴の動きが止まった。多分、僕の言葉の意味をすぐには解釈しきれなかったのだろう。

「つまり、将棋を指してお金をもらう人？」

「つまり、そう」

「あのね……あの人。定家さんと一緒の？」

「まあ、私は女流だけどね」

「へー、へー、すごい。さくらって勝負師なんだ」

「いやあ、まあそうなるのかな」

会話が聞こえたのだろう、他のお客さんもちらちらとこちらを見ている。恥ずかしいのと同時に、タイトルに挑戦していても世間には全く知られていないことが悲しかった。そして、今は将棋のことは忘れていたい。

「全然そんな風には見えない、かわいい女の子って感じなのになー」

「……はは」

視界の端で、白く薄いものがひらひらとはためいていた。女の子らしいもの。

ボートはゆっくりと進む。深いところまで、一度は行ってみたいものだ。

ただ待つ時ほど、緊張するときはない。

夜の国際通り。短い沖縄滞在を楽しもうと、大人たちは店を探して歩いている。それを自分の店に勧誘する人たちもいる。僕は、そのどちらからも目立たないようにしていた。

十分ほどして、彼女はやってきた。

昼間とは違い、長いズボンに長袖のシャツを着ていた。髪はほどかかれていて、ウェーブしながら、肩までかかっている。

「ごっめーん、遅れちゃった」

手を振りながら駆けよってくる美鶴。僕は、少しだけ微笑みつつ、目立っていないかと辺りをうかがってしまう。

「シャワーがなかなかあかなくてさ。ドミトリーってそういうところ不便なのよね」

那覇に戻りレンタカーとレンタサイクルを返した後、ご飯を食べることを約束して美鶴と別れた。ホテルに戻っても、特にすることはなかった。個室は、どこに行っても個室だ。

「じゃ、行きましょ」

「うん」

人の流れをうまくすり抜け、美鶴は進んでいく。僕も必死にそれについていく。そして、彼女は国際通りから外れ、狭い路地を進んでいく。人もまばらで、どこことなくいいにおいがする。

小さな木の扉の前で、美鶴は立ち止った。手招きされて入る。中もそれほど広くなく、半分以上がカウンター席だった。客はおじさんが三人。店主はタンクトップ、頭にはタオルを巻いたいかにも威勢のよさそうなお兄さんだった。

「おうっ、美鶴か」

「今日は綺麗なおねーさんつれてきたよ」

「よくやった。まあ、座って」

店内は非常にきれいに片付けられており、先輩たちに連れて行かれる居酒屋とは少し雰囲気が違う。妙なポスターや写真が貼られていることもなく、見やすいようにメニューとその説明が書かれたものが貼られているだけだった。コップもきれいに洗われていて、おしゃれな広口のものだった。

「あ、このひと島崎さんね。こっちはさくら。将棋指すプロの人」

「へー、それは珍しい。お酒は飲める人？」

「あ、はい」

「じゃ、一杯目はサービスね」

島崎さんは、コップを手に取り中にお茶を注いだ。そしてカウンターに置かれている黒い樽の中からお酒をすくい取り、それもコップの中に入れた。

「くーすーのさんびん茶割りね。俺が沖縄に残ってるの、これ飲むためなんだよね」

「沖縄の人じゃないんですか」

「おう。旅行のつもりで来たんだけど、そのまま居ついちゃった」

「昔ここもドミトリーだったんだって。オーナーがやめちゃった時に、引き継いでお店にしちゃったの」

「ま、料理ぐらいしかできないし、家探すの面倒だったし。まー、楽じゃないけどね」

「へー。でも、私こういう雰囲気、好きです」

コップに口を付けると、ジャスミンのいいにおいと、泡盛のつつくような刺激臭が同時に舞い込んできた。少しなめてみる。あまり癖はないものの、甘いような辛いような、なんとも言えない深い味わいがする。

「おいしい」

「おっ、わかる人だ。美鶴はまだ未成年だからね、飲ませてないんだよね」

「まったく真面目なんだから。ま、あんま得意じゃないんだけどね」

美鶴は食べ慣れているのだろう、どんどんと注文をしていく。出てくるのは、野菜や魚たっぷりの、見るからにおいしそうな品々。派手すぎず、気取りすぎず、沖縄過ぎず。もっと生活に密着したところで店を出せばいいのに、なんて思う。けれどもきっと島崎さんは、那覇が好きなんだろう。何故ここに居つくことになって、どんなに居心地がよくて、ちょっと辛いこともあって、それでも楽しくて仕方ないということをずっと語ってくれた。

「でもね、友達とかが真似しようとするのを止めるんだよね。俺のやってることは結局遊びだって。彼女できても結婚の話できないしさ、三十年続くと思わないし。お金とか将来とか考えたら沖縄来てる場合じゃないよって。でも、俺はここで遊ぶこと選んじやったんだよねえ。そんな奴いっぱいいるけどさ、せめて俺はうまいこと遊んでやろうって。

まだ二年だけど、いっぱいあきらめて帰った奴見たよ。沖縄に休みに来てるんだよね。でもさ、現地の人は精一杯働いてるから、浮いちゃうんだよね。だから、稼ぐ時は稼ぐ、いかに遊びながら稼ぐかが大事だって思ったの」

「相変わらず熱いねー。お客さんこんだけで稼げてんの？」

「ま、きついけどさ。最近はお昼のランチ力入れたりとか、そういうのも楽しくなってきた。なんだかんだ言ってね、お金も欲しいっちゃ欲しいよね。ね、さくらちゃん」

「え……はあ」

二杯目のコップが空いた。目の前がぼんやりとしてくる。

「僕はさ……結果がほしいです」

「そっか、勝負師だもんな」

「もっと、勝ちたいんです……」

少しだけ、隙間を埋めていたものが透明になっていくのが分かった。ただ、少し濃い泡盛が、一時的に溶かしているだけかもしれないけれど。

外は雨。強く窓をたたく音。

さっき、沖縄から帰ってきた。

住み慣れたこの街の方が孤独だなんて、それを知ってしまうのも少し辛い。

けれども、孤独になるのを知ってここを選んだ。

テーブルの横に置かれた将棋盤。脚付きの立派なものだ。

もうすぐ、最終局。

盤上には、海が広がっていた。砲弾の飛び交う、青い青い海。

そのニュースを知ったのは、兄弟子からのメールだった。

そして、続けて本人からもメールが来た。

要さんが、結婚する。

それは別に不思議なことではないし、喜ばしいことのはずなのだ。

要さんへの返信の言葉を何度か打って、消した。

棋譜をどこまで並べたのか分からなくなった。気が付くと窓の外が暗くなっていた。ベランダに出て、遠くを見た。星の見えない夜だった。

思い出せない。僕はどういう風に思っていたのだろうか。

実は、なんてことがないのだ。

最初から、何もありませんでしたのだから。

眠ったのだろうか。

よくわからないままにこの日を迎えた。

着付けをしてもらってる間も、いつも通りにできたような気がする。何を話したかは覚えていないが、おめでとうは言えた気がする。

泣けなくても笑えなくても、この勝負は今日で終わる。今の僕にできることをするしかないと思っている。

鏡を見ると、少し頬の細くなった、僕が映っていた。目じりも口元も、少し下がっている。

「悔いを残さないようにね」

要さんの言葉に、小さくうなずいた。心が波立たない。いや、心に何の潤いもなかった。悔いを残したことなどないし、悔やまない日はなかった。

対局室に入り、盤の前に正座する。木目の入った、白い盤を見つめる。黒い線が引かれていて、四つの丸い点。海もなければ、絵も描かれていない。

少し経って、先輩が入室してきた。二局目までとは異なる、落ち着いた麻色の着物を着ていた。将棋祭りでも見たことがない、初めて見るもの。

駒袋から解き放たれる駒たち。流れるような華麗な書体。見た目では、僕は「銀将」が特

に好きだ。

再びの振り駒で、僕は先手になった。角の右前の歩をつかみ、一つ前に突き出す。指先へとレンズが向けられ、いくつものシャッターの音が聞こえる。

目を閉じた。真っ暗だった。驚くほどに何も浮かばず、吐き気どころか緊張感すらなかった。

指し手が進んでいく中で、僕は少しずつ鼓動が遅くなるのを感じていた。盤面と駒台だけが視界の中にある。ふと顔を上げた。対局相手、記録係、立会人、ちゃんという。風の音、水の流れる音、ふすまの開閉する音、聞こえる。そして盤上に視線を戻すと、世界が木製になる。ああ、これが欲しかったものだ。

世界に、黒い線が走る。前髪だった。きちんとセットしたはずなのに、束になって落ちてきた。かき上げたが、また落ちてきた。

立ち上がり、部屋を出た。トイレに入り、鏡を見ながら髪を整える。これぐらいならば、ぼくだけでもなんとかできそうだ。

「もう、連絡しないって言ったじゃないですか」

個室の中から、嗚咽の混じった声が聞こえてきた。誰か入っているとは思っていたが、電話をしているようだ。

「……あたし、結婚するんですよ。わかってくれたじゃないですか。……あたし、彼と幸せになるんです」

それは、まぎれもなく要さんの声だった。立ち去らなければと思うのに、体が硬直してしまう。

「……先生とは、もう……」

めまいがした。そしてそれは、決して要さんのせいだけではなかった。

頭の中が重たくなったり、軽くなったりする。

くらくらとして、どろどろとした。

……予定より、三日早かった。

洗面台に手をつき、深く息を吸った。まだ始まったばかりだ、なんともない、と自分に言い聞かせる。けれども、この事態への対処は全くできていなかったのだ。一応、ものは用意してあった……けれども、心構えは。

トイレを出て、控室まで走った。なんだか、色々とよく分からなくなっていた。それでも、今は立ち止れない。

視界が固定できない。

初めてではないのだ。一ヶ月に一回は訪れるもの。だから、対局と重なることがないわけではない。それでも……正直、ほとんどは力づくで勝ってきた。この世界に入った時点で、ほとんどの仲間は僕より弱かったのだ。そして、僕が本当に勝負しなくてはならない人とは、年に数回しか当たらない。四年間、僕は幸運にも体調の良い日に勝負の時を迎え、さらに運の良いことに、タイトル戦に出るまでの実力はなく、大切な勝負が増えることはなかった。

やっと、つかんだのに。

運悪く、僕はもっとも大切な勝負のさなかにいる。

左手で腹部をさする。温かくなると、少し楽だ。それでも、そんなことを考えさせられるだけで困っている。ただひたすら盤上に没頭できていた数時間前は、いったいなんだったのか。条件は同じなのだと言われても、それでも僕は悔しくてたまらない。この痛みと、この痛みの意味が、胸の芯まで締め付けてくるようだ。

平べったい駒が、自己主張を隠さずに僕に訴えかけてくる。どれもが玉なんか放棄して、どんどん前に出て行きたがっている。女流は攻めることしか考えない、なんて陰口を思い出す。体が脳を支配して、僕の将棋を邪魔してくる。ああ、攻めてしまいたい。相手は絶対に攻めてくる。ここで殴りあえなくて、これ以上、上を目指せるといえるのか。

混乱が混乱を助長している。こんな混乱は困難な懇願を懇請させる。

「ああ……」

思わず声が出た。心が漏洩した。

「う……」

目を閉じた。息を吸った。大きく吐いた。

舌を嚙んだ。

耳の後ろの方で、きらきらと光るものがあった。僕はそのきらめきを追いかけて、包み込んだ。研修生の頃、初めてその戸惑いに襲われた時のことを思い出す。僕は必死に、それがなかったことにして盤上の絵画を見つめ続けていた。どんどん渦巻いていく模様。次第に、将棋の内容について忘れ始めた。僕は、その棋譜を覚えていない。ただ、将棋が終わるなり涙があふれ、気が付くと知らない公園にいたことを憶えている。

ごまかしのきかない事実の前に、僕はうろたえるしかなかった。どろりとしたものとともに、希望までもが流失していった。子供の頃の僕は、いつか体が心に追い付くのではないかと、そんなことを思っていた。そんなはずはないのだけれど、願っていた。

局面は、動き出している。中盤の難しいところで形を整えていくのが、僕の持ち味だった。定跡の影響が薄れ、対局者の力が試される場面。それなのに僕には、うっそうと茂る樹海のようなものが見えているばかりだった。これから歩む道どころか、これまでの足跡も見失っていた。それでも、必死に頭を働かせ続けた。考えるのをやめたら、何かが消滅してしまう気がした。今後、何度もこのような状況は訪れるだろう。そのたびに立ち止まらないためにも、今こそ前に進まなければならない。

三時になり、おやつが出された。シフォンケーキとストロベリーティーだった。甘い香りが、僕の頭を少し柔らかくしてくれるようだった。ケーキを口にすると、気分もちょっと落ち着いた。

視線を上げると、相手はおやつなどに目もくれず、盤面を睨みつけて読みふけっている。長年女流棋界を引っ張ってきたこの人は、いつだって手を抜かない。時には男性棋戦でも活躍し、世間の目を向けさせることもした。若い世代が台頭してきても、トップはいつだってこの人だ。僕も、尊敬している。この世界にいたことが不本意だとしても、この人と真剣勝負ができること

はとても嬉しいことだ。

イチゴの甘ったるい味が、喉元を過ぎたとき。とにかく僕は、決断した。長い長い勝負でも、乗り越えていかなければならない。焦らされるような局面に対して、喜びさえ覚えなければならない。体内から排出される血と引き換えに、僕はこの勝負を肉に変えてみせる。今まで積み上げてきたもの、我慢してきたことを、体を言い訳にして無駄にしたくなんてない。

駒台から、銀をつまみ上げた。さっき交換したばかり、宿舎に入って一息つけたばかりの銀を、玉の上に置いた。八七銀打ち。相手の突き捨てを咎めに行く、強情でリスクの大きな手だ。自玉は固くなるが、攻めは細くなる。ひたすら相手のパンチを受け続けることを、覚悟しなくてはならない。

それでも、これが僕の棋風だから。

川崎の顔が浮かんでいた。彼との差は、こんなところで立ち止まっては埋まりようがない。僕はまだ、あきらめたくない。男として生きられないのなら、一人の棋士として生きたい。そしていつか、一流の人間がいる場所へ……。

思ったよりも早く、応手が指された。受けたところをこじ開けようとする、剛直な一手だった。予想通りだ。これを乗り越えなければ、次のステージには進めない。僕は、一分と経たないうちにその攻めを真正面から受け止める一手を指した。選択肢はたくさんあったが、流れからは一つしか手はなかった。盤上に赤い川が流れている。敵の兵隊が溺れながらも、こちらの岸に向かって必死に進んできている。僕は、それを岸辺で撃退する。笑いながらできたらいけど、泣きそうになりながら。スカートの裾を引きずって、銃を撃つ。

どれだけ受けても、相手はひるまなかった。もちろんだ。そうやっていくつものタイトルを守ってきたのだ。僕も、ひるまない。相手にも、体にも負けたくない。

「すいません、お茶を」

「はい」

いつもペットボトルの飲料水を持参しているのだが、体を温めなければならぬと思った。そして、蓋を空けるのも面倒だった。少し苦いぐらいが、今はいい。記録係が運んでくれたお茶を、一気に飲み込む。少年は、目を丸くしていた。

「もう一杯」

「あ、はい」

エネルギーが足りない。出ていく以上に補給しなくちゃ、頭が働かない。二杯目を飲み干すと、黙って三杯目を注いでくれた。

時間が残り少ない。僕は立ち上がり、トイレまで走った。出せるものは全て出し、代えられるものは代え、最後の戦いに向けての準備を整えた。

「もう、やるしかないよ……」

多くの子供は、父から将棋を教わった、と言う。僕は、自分で学んだ。将棋の本を買って、こっそりとルールを覚えた。

そのころ僕は病院に連れられて行ったから、なんとなく、自分がどう思われているのかを分かり始めていた。僕は泥んこになって遊んだり、ヒーローのまねをしたり、野球に夢中になってはいけなかった。母は可愛いスカートを買ってきて、かわいい、かわいいと何度も言った。僕は反抗しなかった。自分がどういう存在なのか、ずっとずっと前から分かっていた気もする。我慢していれば、いつか変わることができる。そう、例えば将棋で一番になれば。

教室では何も問題がなかったし、すぐに一番になることができた。学校の中でも、負けることはなくなった。そして、さびしくなった。女の子に負けたくないからと、相手も少なくなった。学校から帰ると、一人きりの部屋の中で、「僕対僕」で将棋を指した。強くなっているのか分からない。

それは、遠足の帰りだった。家の近くだけれど、普段は行かない場所を通った時、「将棋道場」の文字を見つけた。僕は立ち止り、しばらくその看板を見上げていた。

「木田さん、どうしたの」

先生の声に、しばらく考えてから僕は答えた。

「私……」

ここに行きたい、という言葉が飲み込んだ。誰にも言ってはいけない、と思った。僕は、いつかここに行く。誰にも止められないように、こっそりと。

すぐには決行しなかった。ばれたら、将棋自体を取り上げられてしまう、と思った。そして、ついにその日は来た。母が祖母のお見舞いで実家に帰り、父が帰ってくるまでの時間、僕は自由を得ることができた。父はだいたい、八時までは帰ってこない。

いったん家に帰り、ランドセルを置いた。高ぶる気持ちを抑えながら、しばらくじっとしていた。みんなが下校を終えてから、僕は道場に向かった。

ビルの二階。暗い階段を上って、重たい扉を開けた。畳の上に、脚付きの分厚い盤が並んでいた。対局している人はいなかった。

「お譲ちゃん、どうしたね」

「あ……ここ、将棋……指せますか？」

目の前に、大きな大きな手が現れた。視界から消えたかと思うと、頭をなでた。

「もちろん。お譲ちゃんは将棋指すんね」

「……はい！日本一強くなりたいんです！」

それが、師匠との出会い。僕を見守ってくれる人……

盤面に集中していたのに、気配を感じた。来ないと言っていたのに、あの人は現れた。僕に見つからないように襖の陰に隠れているけれど、半分以上見えてしまっている。

顔を合わせるのは半年ぶりぐらいだ。プロになってからは、ほとんど会っていない。

あの人がいなければ、僕はこの世界に入ることができなかつただろう。

僕が本当に心を許している人は、世界に二人しかいない。血がつながっていないのは、あの人だけだ。

自分の頬が緩んでいるのに気が付いた。昔のことを思い出して、存外に楽しかったのだ。辛いこともあったけれど、僕はここまで将棋をやめずにこれた。今日の結果がどんなふうになっても、やめることはないだろう。

局面は、終盤に差し掛かっている。

「さくらを迎えに来ました」

扉の前に、母が立っていた。僕には、連行しに来た警察官に見えた。

「さくらちゃんのお母さん？」

「はい」

恐る恐る、母の顔を見た。両目がいつもの半分ぐらいの薄さになっていた。怒っているときの特徴だった。

「そうですか。いやあ、さくらちゃんは強くなりますよ」

「やめさせます」

「え」

「将棋なんて、やめさせます。さくらは女の子なんです」

母は、僕の手をつかんだ。体が硬直して、唇も震えていた。

「.....将棋なんて、ってことはないですよ。頑張ってる女の子もたくさんいます」

「いいえ。何と言われようとやめさせます」

「それに、さくらちゃんは男の子でしょう」

「.....何を言ってるんですか」

「気付かないはずがない。さくらちゃんは体以外全部男の子だ。だから、将棋を好きになってもおかしくないでしょう」

母はそれ以上何も答えず、僕の手を引っ張って道場を出て行った。

家に帰ってからも、二人とも黙ったままだった。食事の時間が近付いても、母は椅子に腰かけてぼんやりとしていた。

「たっだいまー」

沈黙を破ったのは、樹だった。

「あれ、準備は？」

母は樹にうつろな視線を向けたあと、首を横に振った。

「何かあったの」

僕も、すぐには声が出せなかった。樹はそんな僕を子供部屋まで手招きして連れて行った。

「姉ちゃん、母さん怒らせたの？」

「.....うん」

「悪いことした？」

「……わからない」

「ちょっと待ってて」

部屋から駆け出て行った樹は、大きな四角い箱を持って戻ってきた。

「じゃーん」

机の上に置かれたのは、白くてまん丸いケーキだった。最初意味がわからなかったが、四角いチョコレートに「おめでとう」と書かれているのを見てわかった。僕の誕生日だったのだ。

「って、みんなで言う予定だったんだけど」

「……ごめん」

「謝んなよ。なんか、理由も想像つくし」

「……ご……ありがとう」

それからしばらく、樹以外の家族とは口をきかなかった。道場にも行かなかったし、将棋も指さなかった。

二か月ぐらいたった時だった。

「姉ちゃん、明日街行かない？」

「え？」

「将棋の大会があるんだ。お母さんにはさ、買い物って言っとく」

「……でも」

それまで、樹とは将棋の話をしたこともなかった。それなのに樹は、僕に足りないもの、欲しいものを知っていたのだ。

「なんで我慢するのさ。いい子にしてたって、何にも貰えないよ」

「……うん」

次の日、自転車で行くからとうそをついて、朝早くバスで街に向かった。地図を頼りになんとか大会会場を見つけ、二人で建物に入って行った。

「受け付けはこっちだよ」

ひげのおじさんが声をかけてくれた。

「おや、お姉ちゃんは付き添い？」

「何言ってんだ、桜が参加するんだよ」

「ああ、それはごめん。B級でいいかな」

「Aに決まってんだろ、なあ」

「え、私は……」

「男ならてっぺん目指すもんだろ。Aに一人、木田桜っと」

樹は勝手に参加の手続きをして、自分の財布から参加費を支払った。

「ごめん」

「いいんだよ。ここまでしてやったんだから、活躍しろよ」

会場に女の子は一人だけだった。それでも将棋の大会に参加できるということで興奮して、周

りの目は気にならなかった。言われるがままに着席し、最初の対局が始まった。そして驚くほどあっさり、勝ってしまった。正直、話にならなかった。

「すげーじゃん！ よくわかんないけどさ、圧勝だってみんな言ってたぜ」

「……うん。うまくいった」

次の将棋も簡単に決着が付いた。相手は定跡も関係なく、思いついた手をポンポンと指してくる感じだった。日頃師匠に教えられていたことを実践して、落ち着いて相手の手を咎めていくと、簡単に必勝の局面になった。知らない間に僕は、かなり強くなっていったようだった。

そのあとも、順調に勝っていった。次第に、みんなが注目しているのが僕にもわかってきた。誰にも知られていないうえに、女の子なのだ。負けた中には、泣きだす奴もいた。少し、快感だった。

そして、ついに決勝戦まで来てしまった。相手は、見るからにおとなしそうな細面の少年だった。小学生らしくない落ち着きがあり、ゆっくりと駒を並べる動作を見て、それまでの子とは違うということが感じられた。

「川崎です。よろしく」

「え、あ、木田です」

僕たちの周りには人だかりができていて、急に緊張してきてしまった。とんでもないことをしてしまったのではないか、そんな気がしてきた。前日まで、僕は大会のことも知らなかったのだ。普通に行われるはずのものを、かき乱してしまったのではないか。

勝負は淡々と進んでいった。定跡通りの、がっちりとした相矢倉。それまでの相手とは全く違う、本格的な将棋になった。初めて、ちゃんとした勝負をしているのだと思った。

けれども、相手にとって僕は「ちゃんとして」はいなかっただろう。中盤以降、力の差が如実に局面に反映され始めた。駒が抑え込まれて、突破口がなくなってくる。無理に手を作ろうとして、丁寧に対応されてなお悪くなる。師匠に指導されているときのような、圧倒的な差を感じていた。それでも、あきらめたくはなかった。やっと、将棋を本当に楽しめる相手と出会った、そんな気がしていたから。

僕の囲いは全く崩れていない。それでも、もう勝負はどうしようもなくなっていた。

「負けました」

僕がそう言った時、周囲はざわめき、相手は意外そうな顔をした。普通はもう少し指すものなのか、ぼんやりとそう思った。

少し、こちらが指しにくい局面だった。それでも目に見える差があるというわけではない。きっちり受け続ければ、絶対にチャンスはあるはずだ。

持ち時間はほとんど残っていない。終盤は秒読みで乗り切らなければならない。ここで差をつけられたら終わってしまう。

盤面は四角い。時に、それを忘れてしまうことがある。けれども今はっきりと、八十一マスが視界に入っている。腹部が煮えたぎるような気持ち悪さも、脳味噌が痙攣するような苦痛も、す

でに受け入れている。勝負なんだ。あの日、わけもわからず大会に参加したときとはもう違う。たった二週間に一回、死に物狂いになるだけでいい。将棋棋士とは、そういうものだったのだ。明日からは寝たいだけ寝ればいいし、笑いたいだけ笑えばいい。けれども今は。ここに答えを。一つでいい、答えを。

玉頭付近のごちゃごちゃした勢力争いを、何とか乗り切る一手。できれば、攻めにもなるような一手。攻防にも効く一手というのは、角が活躍する場合が多い。駒台には角が二枚。自玉にも利き、相手にもプレッシャーを与える場所。

一か所、ある。何ということだろうか、そんなところにスペースがあったなんて……。3四角。自玉のと金に当たっており、放っておくことはできない。また、次の2四歩が相手玉に迫る厳しい一手となる。ただ、問題は3三に相手の歩があることだ。この角はただなのだ。けれども角を取ると、4四角が王手飛車取りになる。飛車を取るとやはり2四歩が厳しい。

うまそうな手には気をつけなければならない。相手に角を渡しても、自玉が安全なのか。先に2四歩の方がいいのではないか。

「残りは」

「三分です」

山場は、もう一回来るはずだ。この三分は、残しておきたい。

僕は角をつまみ上げ、ゆっくりと打ちおろした。

一瞬、部屋の中の空気が澄み渡り、全ての音が遮断されたような気がした。ふと顔を上げると、相手もこちらを見ていた。笑っているような困っているような、よくわからない顔だった。

五分も経たないうちに、応手は指された。打ったばかりの角が、相手の駒台に置かれた。王手飛車をかけさせる、挑発的な手だ。そして、それは予想通りの手だった。

問題は、飛車を取った後の猛攻をしのげるか、ということになった。2四歩が入れば、こちらの攻めが切れることはない。

また、湯呑みが空っぽになった。

「お茶を」

「はい」

渡したばかりの角が、今度はこちらの陣に打ち込まれた。ついに、本当の決着の 때가近づいてきている。

僕にとっては運が良かったのか悪かったのか。

両親が別居して、僕たちは母の実家に住むことになった。親戚はみんな優しく、母は僕たちに全く無関心になっていった。

転校した先では一切将棋を指さなかった。全く学校には愛着がわかず、僕は女の子らしく振る舞うことで注目されないようにと努力した。そして家に帰ると、ネットの将棋を指し続けた。誰も、僕にそれをやめさせようとはしなかった。かわいそうな僕から、何かを取り上げようとする勇気のある人がいなかったのだ。

将棋に勝ち続けて、ふと虚しくなることがあった。きっとまだ川崎には勝てないのだろう、何度もそんなことを考えた。再戦したい。勝てなくてもいい、せめて、ライバルと思われるぐらいの勝負をしたい。

県すら違う状況では、顔を合わせることもさえできはしないのだ。僕は決意した。県代表になって、川崎と当たるところまでは負けない。不思議と、川崎が代表にならない可能性については全く考えなかった。すでに、彼からは特別な空気が流れているのを、感じ取っていた。

強くなりたい。それだけが生活の全てになった。詰め将棋もするようになった。そして、将来のことも考えるようになった。このままずるずるとこの体を引きずって歩くよりも、盤上に委ねる生き方をすべきではないか……

「笑いなよ。ゲームなんだから」

ある日、樹は僕に言った。

「勝ってるじゃないか」

僕は、弟の目を見ることができなかった。

「姉ちゃんは、どうなりたいのさ」

「……日本一になりたい」

そして、一年ぶりの大会。再び、誰も僕のことを知らなかった。そして、僕は淡々と指し続け、優勝した。自分でも強くなっているのが分かった。

「全国大会、行くよ」

「ええ、よかったね」

母はまるで関心がなく、虚ろな眼をしたままうなずいた。付き添いが必要だったが、頼める気はしなかった。そんなことまで考えていなかったのだから、途方に暮れた。

次の日、来客があった。家には僕しかおらず、ネット対局を中断して玄関に走った僕は、扉をあけた瞬間に、泣きそうになってしまった。

「さくらちゃんが代表になったと聞いて」

そこには、師匠が立っていた。

「樹君から住所は聞いていたんだ。将棋を続けていると知って、嬉しかったよ」

「……ずっと続けます」

涙がこぼれ始めていた。生まれて初めて、自分は運がいいのだと思った。

「そうか」

「だから……師匠になってください。日本一になりたいんです」

「子供の、ではなくて？」

「プロになりたいです」

「そうか」

鼓動の音が脊髄から染み込んできた。

単純に疲労が蓄積するうえに、全く予想外の一手を指された。飛車の頭にただ捨てるの2七桂。取れば横利きがなくなるが、取らなければ3九が拠点になってしまう。頭の中が沸騰しそうになっている。

ここだ。ここで、三分だ。

奨励会試験に落ち、悩み、迷い、無力感に襲われ、それでも食らいついてここまできた。望んでいた世界にはまだ遠いけれど、今ようやく初めての「日本一」が手に届くところまで来ている。多分、次の一手で決まる。

この手は、僕が放った角のただ捨てるが誘引したものだ。意地とプライドが、ひねった手を見せつけようとさせるのだ。最善手ではない。冷静な一手が、決め手になる、はず。目を閉じた。青い海が……

もう、持ち時間はなくなった。そして、必要なかった。きっとこの一手で、相手も時間を使い切らなければならなくなる。お互い秒読みで、最後の殴り合いだ。

駒台から飛車をつまみ上げた。角を犠牲にして取った飛車だ。敵陣に打ちおろして、攻め合いを期待されていた飛車。僕はそれを、自陣の飛車の横に置いた。

3八飛車。二枚の飛車が、ぴったりとくっついている。見たことのない受けだったが、自信があった。3九などからばらして桂馬がいなくなれば、2八の飛車が縦に利き、攻めが続く。放っておけば、次に桂馬を取ることができる。

これ以上の手があるとしても、今の僕には届かないだろう。

五分経ち十分経ち、相手の持ち時間もなくなった。これからは二人とも一分以内に次の手を指さなくてはならない。脳味噌から乳酸がこぼれおちそうだ。

飛車の力が強く、自玉は絶対に詰まない。その代わりに、相手玉も今のところは安全だ。駒をもらわなければ、こちらが攻め勝つということはない。

そんなわけで、指された手は2五香だった。

桂馬を取らせず、攻め味も見せた強情な一手。善悪なんて考えてられない。言い分を通すわけにはいかない。

すぐに、三十秒が経過する。ここで、だいたいの指し手は決まっている。それでも、延々と読み続ける。終盤の失着は、負けに直結する。特に僕の飛車は、どちらも相手の人質になっているような状況だ。どんな危ない筋が出現するか、わからない。

喉がからからになる。肺が痛くなる。子宮が嘆く。全てのものを受け入れて、勝負に没頭する。

四角い盤が、時折形を崩すようになった。駒台に乗っている駒の文字が見えなくなってきた。頭の中の盤で再現するしかない。

「ああっ」

思わず声が出た。古いものを全部吐き出したのかもしれない。

何分ぐらい戦ったのだろう。よくわからないが、負けにはなっていない気がする。しかし、全く勝ちにはなっていない。これが、女流棋界を支えてきた力。これが、将棋にまっすぐ取り組ん

できた力。

二枚の飛車が、いつまでもその力を保っていた。そしてやっと、僕に攻める手番が回ってきた。戦いは二筋へと移った。攻めるといっても、渡す駒によってはこちらが急に危なくなってくる。読まなければいけないことが多すぎて、頭の中の盤がくるくると回転しているようだ。しかし、一筋の道も見えている。この勝負は、この道がどこに続いているかによって決まる。

後手玉に詰めろがかかった。それに対し、詰めろ逃れの詰めろが放たれた。ここまでは、プロならば誰でも読める手順だ。問題は、ここでどう受けるか。一見よさげな手は、全て罠が待っている。玉を動かすのは、と金に迫られて無効。中合いをすると、香車を打たれて厳しい。だが、一つだけ、駒を使わず、玉も動かさない手があった。絶対にこれで勝ちという確信はないが、それでも何となくやれそうな気がした。

3八の飛車へと手が伸びる。その時、袖が駒台に引っ掛かった。歩が二枚、こぼれ落ちる。

「七、八……」

しかし、秒読みは待ってくれない。この手だけは絶対に指さなければならない。僕は飛車の後ろに指をかけ、何とか一マス、押し出した。

三七飛車。

攻めに利かせ続けながら、玉の逃げ場所を増やした一手。王手は続くが、こちらの玉に詰めはない。これで、ぐっと勝ちが近づいたはずだ。相手から有効な手が少ない。と金が動く手には、2七飛車寄りが決め手になる。これが、詰めろ逃れの詰めろ。受ければ、2五の香車まで取れる。勝ちになった……

けれども、意識が遠のいていく。駒台からまた歩が落ちた。駒を拾わなければならないが、右手は床についたまま動かなくなっている。首に力が入らず、腰から下しか見えない。読みにない手を指されたら、もう対処できないかもしれない。ああ……

「負けました」

その声を、僕はすぐには理解することができなかった。最後の力を振り絞って頭を上げると、そこには深々と一礼する峰塚女流四冠の姿があった。

そしてこの瞬間、峰塚女流三冠になったのだ。

僕も、精一杯頭を下げた。

「これで、手が無いもんね」

いろんな人が対局室になだれ込んできた。フラッシュがまぶしかった。

「ありがとうございます」

そして僕は、涙が止まらなかった。泣く予定なんかなかったのに。今一番うれしいのは、峰塚さんが僕を認めてくれたことだった。ここから逆転なんて、いくらでも起こることだ。僕相手にはそれがないと思い、投了してくれたのだ。

師匠が肩を叩いた。どんな顔をしていいかわからなかった。要さんが笑っていた。僕も笑おうとしたが、笑えているだろうか。

一つ目の日本一を、やっと手に入れた。けれどもまだ、まだまだ遠い。女流の一番にも、若手の一番にも、将棋の一番にも、とても遠い。

掌の中にある歩を見つめながら、僕は誓った。まだまだ、立ち止まらない。

多くの祝福を受けても、家に帰ってくると一人だった。

いつも通りの自分の部屋を見て、僕はまだ道の途中なんだと実感させられる。将棋盤に棋譜のコピー、ネット対局にしか使わないパソコン。強くならなければ、言い訳のできない生活。

家を空けている間に、ポストにもいろいろと溜まっていた。その中に、青い封筒があった。差出し人には、築山美鶴と書かれていた。

中には手紙と、銀色のペンダントトップが入っていた。細長くて、剣の形をしている。

「木戸桜様へ

この前は本当にありがとうございました。助かったし、面白かった！まだまだ話したいことあるし、また来てね。

ほんとはね、アクセサリ一作って食べてく予定だったんだ。でも、一年で二万円しか売れなかったんだ。今は趣味で作ってるよ。

桜には、これが似合うかなと思って。あ、将棋頑張ってるね。

返事待ってるぞ！

みつる」

さっそくそれを、ネックレスに付けてみた。面白いほどに、僕には似合わない。けれども、好きになった。これを選んでくれた美鶴に、感謝したい。

洋服箆笥の奥にしまっていたものを、思いっきり引っ張りだした。履き古したジーパン、お気に入りのジャケット。

一つの区切りが付いた。息苦しいのは、いったん止めよう。

比べ物にならない空気の緊張感が、こちらまで伝わってくる。

山中の老舗旅館。タイトル戦にふさわしい、簡素で美しいところだった。今回僕は勉強のためだけに、ここまで来た。

定家四冠対川崎六段。注目の対局だが、東京から遠いということもあり一日目から来ている人は少ない。ネット中継もされているので、自宅で見ているプロも多いのだろう。

男性のタイトル戦では、だいたいのプロが和服を着る。定家四冠はもちろん、川崎も和服を着ている。濃い藍色の、さっぱりとしたものだった。線が細いので、似合っているとは言えないが、何となく風格が出ている気もした。

すでに対局は始まっており、本格的な相矢倉になっている。最近は様々な戦法が指されるようになり、特に若手は自由奔放な振り飛車を好む傾向にある。しかし川崎は、子供の頃から居飛車の基本的な形ばかりを指し続けている。研究会に参加しているという話も聞かないし、将棋会館でもあまり見かけない。家で黙々と研究しているのだろうか。それとも、実戦だけで鍛えられているのだろうか。長い付き合いだが、そういうことは何も知らない。

ここ最近仲間内では、川崎が何勝できるのか、が話題になっていた。タイトルを獲る獲らないでは、賭けにならないのだ。何せ定家四冠は、十年間で三度しかタイトルを奪取されていない。しかも普段の対局でも、二十代に対して勝率八割以上、六段以下には二敗しかしていないという驚異的な勝ちっぷりなのだ。一勝でもすれば川崎の健闘、そんな雰囲気はみんなの間に漂っていた。

冷静に考えれば、その通りだと思う。川崎の力は若手の中では筆頭だが、将棋界の中ではまだまだひよっこなのだ。誰に勝ってもおかしくないが、誰に負けても驚かれない。調子がいいときにこうしてタイトルに挑戦できても、長い七番勝負の間ずっと調子を維持できるわけではない。川崎は負けるだろう。二勝できれば上出来だ。

それでも。それでも、僕は川崎を応援している。僕がずっと目標としてきた人間が、あっさり負けるところなんて見たくない。川崎を目指すことが、頂を目指すことであってほしい。

まだ、勝負どころは来ていない。何百局と繰り返されてきた序盤だ。おそらく一日目はそれほど進まない。二日制では礼儀みたいなものだ。

数日前に自分が経験したものとは、明らかに違う空気だった。本当の日本一が、ここで争われているのだ。多くの人が望んでも届かない場所。年間のべ十四人、実際には十人未満しかその舞台には立つことができない。タイトルを持つのはたったの四人。遠い。ひどく遠い。

「んー、今日はどこまでいくかねー」

立会人のベテラン先生は、将棋の内容には今のところ興味なさそうだった。何かトラブルがあったり千日手になったりしたら大忙しだが、今日のところは特にすることはないのだ。気が緩みまくっている。

「案外川崎は手を用意しているかもしれませんよ」

真面目に駒を動かしているのは善波五段。僕たちと同学年で、奨励会も同期。ただ四段になったのは二年遅れ、今のところ目立った活躍もない。

「まあ、ここでどう指すかだよねえ」

その前に座るのが僕。善波が定家四冠、僕が川崎の側を持って検討をしている。局面は矢倉の最新定跡、先手が穴熊に潜った後、後手がどう対応するかというところだ。

「まあ、6四角が普通だね」

「でも6五歩に7三角と戻るのが、なんかねえ」

「そうは言ってもみんなそう指すからね。ただ、俺も必然とは思わない」

他にもプロは来ているのだが、解説会に出ていたり、散歩に出かけていたり。二日酔いで寝ているんじゃないかという人もいる。

「あ、今の載せてもいいかな」

「え、いやあ、控え目をお願いしますよ」

メモ帳片手に声をかけてきたのは、ネット配信係の根岸さんだ。パソコンに指し手や解説を入力し、頻繁にネット配信している。指し手のほうはなかなか進まないの、控室の様子などが主な現在の情報だ。

「ええと、『善波五段いわく、現在の定跡が必然とは思えない』と」

「いやいや、まずいですよそれ」

暇といえば暇だった。それでも、全てを見守りたいという思いがあった。後はともかく、最初のタイトル戦でどのような戦いぶりを見せるのか、それを見届けたかった。

「木田さんは何かコメントないかな」

「うーん。川崎は胃腸が弱いんですよ。昨晚いっぱい食べたと聞いたので、胃腸の調子がどうなるかが勝負に響かないといいですね」

「なかなか凝ったコメントありがとう」

自分が対局しているときは、あんなに時間が足りなくなるのに、なんて思う。今、川崎も独特な時間に浸っているだろうか。

あそこに、たどり着くには。

駒を動かしながらも、余計なことばかりを考えてしまう。席をはずし、外の空気を吸った。全く緊張感のない空気だ。

腕をぶんぶんと振り回した。将棋って、疲れる。

「しかしねー」

二日目。控室の人数も増え、活気も出てきた。

しかし、対局の方はいまいち盛り上がっていない。

封じ手も予想通り、いまだに前例のある展開だった。

「これ、このままいったら見所ないよ」

A級の先生が、眉をしかめながら局面を見つめている。そう、この前例は、一方的に後手が負けたことで有名な一局なのだ。しかも中盤に差し掛かり、変化するタイミングが難しくなっている。先手玉は穴熊に潜り、いつでも攻撃する準備ができています。それに比べ後手は、駒をもらわないと反撃できないし、囲いもそれほど固いとは言えない。何よりひどいのは、手渡しされ

たときに指す手が難しいということだ。

「知らないってことはないよなー」

善波も首をかしげている。僕も、同じ気持ちだった。あの、中沢九段と挑戦権を争ってきたときのような熱いものが、感じられないのだ。このまま負けても、何も残らない。何とかしろよと、今すぐ対局室に行って叫んでやりたい気分だった。

「あっ」

善波が叫んだ。モニターを指さしている。

「おっ」

「えっ」

皆それぞれの声を上げた。動いたのは先手の駒。定家四冠の方が、手を変えたのだ。

「なんで」

「攻めつぶす気か……」

不自然、というほどの手ではない。しかしここで開戦するのは、少し急ぎ過ぎているように思える。

「焦れたのかな」

「いやあ、研究してたんじゃないですか」

「これで悪くなったらひどいね」

僕は、あまり大した感想を持てなかった。その手の意味がわからなかったからでもあるし、それで形勢が悪くなるようにも思えなかったからだ。そして、僕以外の男性プロは、たった一手にこれだけ大騒ぎしている、という事実に対し少し胸を痛めた。そこが、彼らと僕の差なのだろうか。

長考が続いた。それはそうだ、全く新しい局面、今まで誰も経験したことのない世界に突入したのだから。まあ、矢倉の場合数手後には同一局面に合流、ということも少なくはないのだが。果たして、川崎がそれを選ぶのか。定家四冠が、それをよしとするのか。何となくだが、二人とも意地を張るタイプだと思う。クールなようでいて、筋は通すのだ。

にわかに控室が騒がしくなった。根岸さんの仕事も増える。解説から帰ってきた先生がコメントをし、交代で別の先生が解説に向かう。善波や僕にもコメントが求められる。検討班が二つに増え、駒を動かしながらああだこうだ言う。ネット中継を見ていた若手から僕や善波にメールが入ってくる。「アマの大会で前例があるようで……」「どのような手つきでしたか?」「俺なら後手持つ」

みんな将棋が好きなんだなあ、と思う。当たり前だけど、時折疑ってしまうことだ。プロになる途中では、辛くてやめたいと思うことがあるだろうし、将棋自体が嫌いになって行く人も見てきた。僕だって、何度も挫折しかけた。

「ひゃー、食らっちゃった」

「こりゃいかん。穴熊はひきょーなり」

けれども、ここにいる人は、将棋を楽しみまくっている。自分が対局室にいないことを悔しがっている人だっているだろう。それでも、目の前にある素材に対して全力で取り組んでいる。僕も、その中に入り込もうとした。将棋がどこまで好きなのか分からなかったが、この人たちの

中にいることは幸せだと思ったから。

約一時間。川崎は一度も対局室から出ず、ひたすら考えていた。簡単なようで、考え続けることは大変だ。どれだけ考えても、相手が予想にない手を指してくることがある。どれだけくまなく検討しても絶対に十分な考慮などないので、どこかで諦めてしまいそうになることもある。相手の指し手を見てから決めればいいや。向こうだって同じだけしか時間がないんだし。色々な言い訳をして、思考を停止する。

二人は、妥協をしなかった。川崎の手に対し、定家四冠も長考。それは、さして難しい応酬ではないが、この一局の流れを決める大事な数手だった。約三時間、僕らも濃密な時を過ごした。固さを生かして攻める王者に、広さで対抗する挑戦者。お互いの主張が真っ向からぶつかり合って、タイトル戦にふさわしい攻防だと言えた。

途中で、解説会への参加を打診された。あまりに指し手が進まず、話のネタが尽きたらしい。まあそれは表向きの理由で、実際にはタイトルを取ったばかりの女流でも出てくればサービスになる、ということだろう。

解説会は別館で行われていた。渡り廊下の空気はひんやりとしていて、控室に熱気が充満していたことを実感させられた。僕たちは好きな時に温泉に入ったりできるが、対局している二人にとっては周囲の環境など関係ないことだろう。僕も、自分がどこで指しているのかをしばらく忘れていた。

不便な場所にあるにもかかわらず、多くの人に来ていた。それだけ注目度が高いということだろう。僕が入っていくと、今までにない温かい拍手で迎えられた、気がした。トーク力もなく目立った個性もない僕にとって、歓迎されるには将棋で頑張るしかない、ということを実感する。

「それにしても激闘だったね」

解説はA級の先生だが、なぜか僕の方が色々と聞かれてしまう。まあ、そのために呼ばれたのかもしれないが。

「ええ、疲れました」

「いやあ僕もね、三八飛車から三七飛車にはビックリで。ああいうのは、思いつくだけで価値があるよ」

「ありがとうございます」

「まあ、しかしね。タイトルは防衛して初めて一人前とも言うからね。来年が本当の勝負だね」

「そうですね。頑張ります」

「うん。じゃあ、局面を見てみようか」

モニターに映る局面は、先ほどと変わっていなかった。少し手を戻してから、解説が始まる。ふと、大盤の中に夕日が見えた。それが何を意味するのかは分からないが、似合っていると思った。沈んでいく太陽を捕まえるような、そんな対局なのかもしれない。物音一つ立てない時間にも、二人は全力で戦っている。燃えながらも、日没へと向かう太陽……

三十分経った頃、初めてモニターの中で駒が動いた。僕と先生は、それを見てしばらく唸る。全く解説していなかった一手で、すぐには狙いが分からない。だが、とりあえず悪い手でないと

いうことはなんとなく分かった。僕らとは全く別次元のところで、二人は戦っている。

「そういえば、木田さんは川崎君の手を予想するのがうまい、と聞いたことがあるんだけど」

「え、どこですか」

「どこだったかなあ」

以前の控室の話が有名になってしまったらしく、所々でこんなことを言われる。中には《定家を恐れぬ女》と呼ぶ人までいる。まあ、気にすることもないのだけれど。

「で、そんな木田さんの予想は」

「予想にない手を指すんじゃないかとは予想できます」

あの時も、当てたわけではないのだ。僕にわかるのは、空気だけだ。川崎は、僕らとは違うエンジンを搭載している。走り方が、まったく異なるのだ。定家四冠の方は、走るテクニックが桁違い。どんな危険な道も、安全運転であるかのように駆け抜けていく。

「ははは。じゃあ、おじさんはじっと歩を打つのを予想しようかな。木田さん、外れる前提で予想を」

「えーと」

考えている間に、その手は指された。予想通り、予想外の手だった。

「解説しにくいなあ」

そんな感じのまま、約束の一時間が過ぎた。ほとんど手が進まず、よくわからないまま僕たちの役割は終わった。先生はまだ残るようで、僕は一人で控室へと帰路についた。

本館へと戻る渡り廊下、藍色の和服がフラフラと揺れていた。遠くを眺めているような、近くを見つめているような、ボーっとしているような。

僕は、そっとその後ろを通り抜けようとした。

「強すぎる……」

それは、僕に向かって言ったのか、独白なのか。とても、自信がない時の声だった。

ああ、そうなのか。僕は知らなかったことを、知った。

川崎は、冷静に強さを見ていたのだ。だから、恐れてしまったのだ。

声をかけたかった。僕は恐れなかった。相手の強さを知らないまま、知ろうとしないまま戦い、勝った。

強さでわたり合おうとしてはいけない。勝利という結果を求めなければ。

声をかけたかった。けれども、通り過ぎた。対局者は、自分一人で勝負を付けなければならない。

彼は負ける。確信した。

確信は、当たった。

そして、結果は0-4。

空の上にもう一つ空があるような、言い知れぬ恐怖を感じた。

「え、引っ越すの？」

相変わらず家出をしている樹は、我が家のようにソファでくつろいでいる。

「うん」

「ここ、いいのに」

「仕事場が遠いから」

「それ、ここを選んだ理由じゃん」

紅茶を入れながら、その時のことを思い出す。両親とはほとんど会話もできなくなっていて、家を探すときは全部樹についてきてもらった。心細かったのもあるし、その方が不動産屋が安心するということもあった。女流棋士という仕事はなかなか理解されなかったし、実際にまだ収入がなかった。悔しいことだが、自由業よりもフリーターの方が信用がある。

「事情が変わったんだよ。仕事も増えたし」

「事情？ 情事じゃなくて？」

「怒るよ」

「真面目な話。このまま将棋だけで生きてくわけ？ 男か女かは知らないけどさ、支えてくれる誰かとかさ、そういう人のこと考えたったいーだろ。ここにさ、俺以外の人来た？ 引越しには賛成だよ。けど、将棋のためって言うんなら反対」

樹は、世界で一番僕のことを理解している。それだけに、彼の本音は世界一痛い。

「.....将棋以外のこと、考えてるよ。好きな人が結婚して、目標としてた人が惨敗して、自分は今後どうしていいか分からなくなって。せめて、みんなとおんなじ環境だったら、って思った。遊んだり、研究会したり、そういうこともしていいかなって。まだ、そんな資格はないと思ってたんだ.....。でも、もういいかなって。普通のもの、欲しがっても」

「最初っからいーだろ。姉ちゃんは、特別な悩み抱えてんだ。普通に持てるものぐらい、求めろよ」

「だけどね.....今より弱くなるのだけは嫌。将棋の成長まで普通になってしまったら、そうしたら.....」

「それはそんな時考えればいいだろ。姉ちゃんはさ、女流の一流になったんだからさ、自分を卑下すんのやめなよ。男だったらとかさ、いいじゃん別に。俺だってさ、バイトじゃいけてる方だけど、プロから見たらすっごい下手だと思うよ。けど、金くれるっていう人いるから、ありがたくもらってるよ。普及とかさ、聞き手とか、強い女流に需要があるんだから、ありがたく色々受け取っちゃえばいいんだよ。自分探しは暇な時にしろよ。で、将棋強くなるためには、あんま暇ないんだろ？」

「.....ありがとう、樹」

「なんだ、照れるな」

「女の子だったら、抱きしめてあげるのに」

「なんだそりゃ」

胸のペンダントを握りしめ、僕はしっかりと決意をした。

もう、自分をいじめない。

樹の手を握った。眉をひそめるが、振り払われたりはしなかった。

「今度、男性棋士との対局があるんだ。ネット中継もあるし、結構注目されると思う」

「そっか。頑張れよ」

「……勝つ。勝つよ」

「初めてだろ。そんな意気込まないで、頑張ればいいんじゃないの」

「……うん」

本当に、抱きしめたかった。僕は幸運にも、樹のおかげで本当の孤独にはなったことがない。それがどんなに大きなことか、実感していた。

「よくここまで来たよ。本当は、もっと早く挫折すると思ってた。姉ちゃんは、すごいよ」

「ありがと。樹もそろそろ、頑張ринаよ」

「そのつもりだよ」

この温かさは、今だけのものかもしれない。僕は、次の勝負を本当に大きなものだと考えている。その結果によっては……

紅茶が冷めて、少し苦くなっていた。

山手線の内側は、切ない。

思ったよりも静か。皆、仕事をしているのだろうか。なかなか道を憶えられない。香りが、ないから。

引っ越して実感するのは、僕は本当に趣味が少ない、ということだった。本やCDなどはほとんど持っていない。パソコンも対局にしか使わないので、中身もほぼ空っぽ、プリンタもない。もちろん、植木鉢も水槽もない。

生きているか、将棋をしているかの人生だった。

どこにいても一緒だと思っていた。どこにいても、将棋はできるし、できないことはできない、と。

それでも、わかってしまったことがある。僕は将棋だけでなく、将棋の世界が好きだ。将棋に携わる人々や、将棋の仕事が好きだ。

だから、孤独に逃げるのは、やめなければいけないと思った。心地よいけれど、やめなければ

。午後四時。僕はカーディガンを羽織り、家を出た。将棋会館までは、二十分かからない。

「木田」

その日の朝、会館の玄関で。

「川崎」

「おはよう」

振り返ると、スーツ姿の青年。

「いよいよだな」

「別にたいしたこと、ないよ」

こんなに早くから、こんな格好。川崎も対局なのだ。知らなかった。

「でも、初めてだろ」

「うん。まあ、これからどんどん増える予定」

階段を上がる。いつもと変わりはない、と思う。特に気合を入れたりはしなかった。服装もたいて凝ったものではない。化粧も薄いし、髪も軽く結ってきただけだ。

それでも、胸が痛い。血液が、速すぎる。

対局室に入ると、相手はすでに盤の前に着座していた。ひよろりとした体を、ゆっくりと左右に揺らしている。

夏川四段。歳は僕より二つ上、プロになったのは去年。彼は、僕と同じ時に奨励会を受験し、合格していた。

運命、とまでは言わない。それでも、意識せざるを得なかった。スタート地点では、僕が負けた。その後、異なる道を歩んできて、今日、対峙する。

隣の部屋には、川崎がいる。タイトル戦は惨敗だったが、それでも調子を落としたりはしなかった。ひよっとしたら、結果はただの実力通りだったのかもしれない。これからまた、彼は活躍するだろう。

僕が手を伸ばしたいのは、あそこなのだ。夏川四段は、通過点にしなければならない。

ベテラン観戦記者が、僕と夏川四段に挨拶をしにきた。女流が男性棋士と対戦した棋譜は、だいたい新聞に載る。ときには悲惨な棋譜が、全国にさらされてしまうことになる。それは、当たり前前の悲惨として、受け止められる。

僕らは、いい棋譜を作るため参加させてもらっているのではない。多くのファンに興味を持ってもらうことが大事なのだ。判官鼻肩で僕を応援してくれる人は多いのだろうが、僕が勝たなければならないと思っている人はいない。負けて当たり前。勝てば話題になる。その程度のことだ。

とんでもない。

ここにたどり着くまで、どれだけの苦勞をしてきたか。同じ屋根の下で、同じことを生業としてきた。夏川四段が遊んでいるときも、僕は将棋をしてきた。女であるということを除けば、僕が負けていい理由なんて見当たらない。そして、僕は女ではない。

振り駒で、後手になった。前髪が少し邪魔だったので、かき上げた。

相手は振り飛車党。静かな手つきで、角道が開けられた。僕はそれに対し、飛車先を突いた。矢倉にも角換わりにもならないが、何となくこちらの方が気合が入ると思った。

持ち時間の短い将棋では、知っている形になった方が随分と安心する。だからこそ、どのような戦型を選ぶかで、相手が僕の力量をどのように考えているのかが分かる。特に夏川さんは、相手によって指し方を変えるタイプだ。ベテランの先生や成績の悪い若手にはゴキゲン中飛車で軽快にさばき、上位の先生や元気のいい若手にはじっくりと四間飛車で指す。相振り飛車になりそうなきときは最初から様子見のような手を指す。

三手目、1六歩。予想外だった。これではまだどちらとも言えない。僕は、角道をあける。夏川四段は、5六歩と付いた。ゴキゲン中飛車だ。

細かいことを気にしている余裕はない。僕は、5二に右の金を上げる。ゆっくりはしない。このまま超急戦と呼ばれる変化に誘う。そして、予想通り避けられる。研究で差が出るような変化には持ち込まないのだ。それが勝ちやすいのだと夏川さんは知っている。

抑え込めるかどうか、そういう勝負だ。夏川さんは顔色一つ変えず、時折首をかしげている。別に、困っているわけでも疑問に思っているわけでもない。子供の頃からそうだったが、彼は盤上で考えることが苦手なのだ。頭の中の駒は自由に動くが、盤上の駒はじっとしている。盤上を見つめていると、現状の局面に思考を引き戻される、と語っていたことがある。

僕は、いつになく盤上に没頭していた。元々僕には、はっきりとした盤面が見えていない。そこには様々な絵が混入し、ときにはキャンバス自体が消失する。見ているけれど、見えていない。

駒がどんどん前進し、思い通りの展開に持ち込めていた。このままいけば、何も問題がない、そう思っていた時だった。首をかしげたまま、夏川四段は大きくうなずいた。そして、細い右腕が、盤を横切る。7七の桂馬が、8五の歩を取った。それは、すぐに僕の飛車に取り返される桂馬だ。しかしそのあと飛車をぶつけられる。こういう戦型ではよく出てくる筋だが、今されるとは思ってもみなかった。

こんなものは、取るしかない。僕の駒は抑え込むために前に出ているので、玉の固さというものはないに等しい。飛車角を好きに動かされたら、終わりだ。飛車交換されても、先手先手で受けに回れば、何とかかなりそうな気がする。それ以外に活路はない……

桂馬を得しても、受けには効かないし、すぐに攻める手もない。相手は陣形も低く、飛車の打ち込み場所はない。だから、選択肢はこれしかなかったのだ。決して、これで有利だとは思わない。それでも、他の手ではどんどん苦しくなる。

8二飛車。取ったばかりの飛車を、元居た場所に打ち直す。あの時とは違う、切ない自陣飛車だ。

それでも、このような展開が、なんとなくいけると思っていたからこそ、あの桂馬が見えなかったということでもある。夏川も読み切っているわけではないだろう。なんとなく攻めが続く、そう考えるタイプだ。そして、なんとなくで押し切れる相手にだけ、彼はこの戦法を選ぶ。

色々な歩が突き捨てられ、角が出てきたり引いたり。こちらはもう使える駒がないので、耐えるしかない。持ち時間もなくなり、秒読みの声が頭蓋骨を揺らしているようだ。

駄目だった。途中で気が付いた。夏川さんは全てを読み切っていた。僕の力、僕の性格、僕の気合、僕の空回り。決して強い若手ではないが、何度も何度も勝負の一局を勝ってきた彼には、色々なものを見切る力が付いているに違いない。振り回されてふらふらになった僕には、少しの優勢を維持しきるだけの余裕などありはしなかった。

僕は、ずっと相手のことを見ずに戦ってきた。ほとんどは勝って当たり前の対局で、間違えないこと、当たり前のことをし切ることを考えてきた。そして強い相手と指すときは、もっと強い相手のことを考えてきた。そこを超えた先にあるもの。ライバル、頂。その一局を勝っても、先

につながらなければ意味がないと思っていた。

「こうか」

小さな声だった。でも、決定的な一言だった。ついに僕の陣内に飛車が打ちおろされ、そしてそれは捕まえることができなかった。食い破られた。僕の将棋とともに、僕の心構えを。

負け惜しみではなく、読みとかそういう部分では差がない、とよく感じる。けれども勝つための技術に関しては、彼らとの間にはっきりとした差がある。

作業のように、終盤が過ぎて行った。体から熱が逃げていくのが分かった。僕は今日のはじめて戦場に立ち、そこでの礼儀を叩きこまれた気がした。

「負けました」

その言葉を発するのに、何の躊躇いもなかった。完敗だった。笑いたくなるほどの、惨めな負けだった。

高いけれどたいしたことのないランチを食べて、何も買う気もないのに百貨店をうろうろした。山手線に乗り初めての駅で降り、ぶらぶらして、結局帰宅した。

気持ちが軸を失っていた。現実、あっさりと僕に宣告をした。弱いだけでなく、質が違う。今から努力して、どこまで追いつけるというのだろうか。川崎は、ずっとずっと先にいる。

無理だ。

ワインの栓を抜き、コップに注いだ。味わうこともなく、喉に流し込む。

酔いが苦しみを麻痺させると同時に、僕の中の僕が、鮮明にこちらを見つめているのが分かった。本当は、こんな日は来ない方がよかったのだ。女流の中でも一番になれなくて、苦しくて苦しくて、そっちの方がよかったのだ。今日の苦しきは、一刀両断された苦しみだ。心の隙間は埋められるが、完全に分離してしまったものはなかなかくっつかない。

盤の上に、座布団を置いた。今は、見たくない。

いつかの記憶が、脳裏をかすめた。

電話を手にした。

ダイヤルする。呼び出し音が三回、四回、五回……

「あ、どうしたの？」

不安定な声。寝起きなのだろうか。

「いまどこ」

「え、家だけど」

「来て」

「え」

「ここに来て」

「ここってどこ」

「私の家」

「それ、どこ」

「メールで地図送るから。三十分で」

「いや、ちょっと待てよ、おい」

電話を切った。喉がからからになり、ワインを飲み込んだ。

地図とマンションの名前、部屋番号を記載してメールを送る。そして僕は、ベッドに飛び込んだ。とめどなく流れてくる涙を、シーツでぬぐった。

女だ。今僕は、女だ。

何故こんなことをしてしまったのか。

自分の中の色々なものが、僕の中から飛び出そうとしているようだった。

わかっていた。届かないものは、届かない。それでも、目指していたかった。近づいていたんだ。けれども、遠すぎた。タイトルを獲ったぐらいで、何かが変わったと思い込んでいたのか。あの日から、一度だって距離が縮まったことはなかった……

目をあけられなかった。自分のもの、自分の姿、何も見たくなかった。

四十分ほどして、ドアホンが鳴った。起き上がり、頬を叩いてから玄関に向かう。のぞき穴の

向こうには、不安げな顔の川崎がいた。

「ごめん」

口から出てきたのは、そんな言葉だった。

「どうしたの。入っていい？」

「うん」

しわくちゃのシャツにジーパン。髪の毛はべったりとしていて、多分急いで家を出てきてくれたのだろう。僕は、初めての来客を招き入れた。

「酔ってるの」

「うん」

「今日、対局あったんだろ」

「うん」

「それで飲んでたの」

「……それだけじゃない、と思う」

新しいコップにお茶を入れようとしたら、川崎はそれを手で制した。そして、ワインボトルを手取る。

「こういうのは、酌み交わしながら語るものでしょ」

「じゃあ、注がせて」

「おう」

冷蔵庫から、チーズを取り出した。僕は、何も食べずに飲んでいたので。

「なんか作ろうか」

「え」

「木戸ってさ、料理しないだろ。台所見てわかった」

「材料ないよ」

「なんかあるだろ」

川崎は台所で勝手に料理を始めた。大したものではなかったが、卵とポテトチップス、鰹節で一品作ってしまった。盛り付けにもこだわっているようで、見た目がさっぱりしている。

「昔よく作ったんだよ」

「これを？」

「みんなうちで遊んで、お菓子を置いてくんだよね。だから次の日、こんな風にしてさ。ネギとか入れてもいいよ」

食べてみると、とてもやんわりとした味がした。しけりかけたポテトチップスなのに、ちょっとおしゃれな食べ物みたいだ。

「よく料理するの」

「まあね。それが東京出てくるときの約束だったから。将棋で失敗しても、ちゃんと一人で生きていけるように、ってことだったみたい」

「そうなんだ」

川崎の意外な一面を知った。まあ、ほとんど私生活のことなんて知らなかったのだけれど。

「で、どんなんだった」

「え」

川崎は、盤から座布団を取り上げた。そして、駒を整列し始める。

「ちょっ……」

「将棋のことは、将棋で解決。それがプロっしょ」

「待って」

「木田？」

僕は、川崎の手を握っていた。川崎の瞳が、直線的にこちらに向いている。

「プロ……じゃない」

「何言ってるんだ」

「私と、川崎たちは別の世界にいる。同じ理屈では語れない」

「将棋で食ってんだろ、同じプロだよ」

「わかれよ！」

僕は川崎の手を離すと、盤の反対側に座った。歩を五枚取り上げ、絨毯に転がす。と金が五枚だった。

「川崎が先手」

「……わかった」

「絶対、手を抜かないでね」

「……待って」

川崎は、コップを手に取り一気にワインを飲みほした。

「条件は、一緒だ」

「……うん」

二人、無言で頭を下げた。川崎の体はフラフラと揺れていた。僕も、おかしくなっているのかもしれない。初手、7六歩。僕は、3四歩。

涙がこらえられなかった。何故かわからなかったが、手が進むにつれてその理由が理解できた。僕が思いだしているのは、小学生の時のあの日。そう、川崎と将棋を指すのは、あの時以来だったのだ。

「木田……大丈夫か」

「わかんない。わかんない……」

川崎が、僕の背中をさすってくれた。それでも、次の手を指した。目の前がぐるぐると回っていた。それでも、次の手を指した。

儀式のように、淡々と指し続けた。何を指しているのかもよくわかっていないけれど、本能がちやんとした手を選んでいようだった。川崎も、目がうつろになっている。元々お酒に強くないのかもしれない。

「あ……」

いつの間にか川崎の王将に、詰めろがかかっていた。何だ、勝ちじゃないか……そう思ったけれど、全く僕が読めない順で、こちらの玉が詰まされた。

「負けました……」

「なんか、詰んじゃったね……」

悔しくもなんともなかった。知っていたことだから。川崎は僕よりうんと強いし、どんな時でも手を抜いたりしない。それでいて、誇らしげにすることも、卑屈さを見せることもない。涙が止まり、目の前が真っ暗になった。本当に、安心してしまった。もう、何も考えることなんて、ないんだろう。

目が覚めると、ベッドの上だった。少し頭が痛い。体を起こし部屋の中を見回すが、誰もいない。

テーブルの上には、水の入ったコップと、サンドウィッチがあった。手にとって見てみる。近くのコンビニで売っているものだ。

将棋盤には、見覚えのある局面が。夏川との将棋の、投了したところだった。その横には、広告の裏に書かれた棋譜が。中盤以降、一手一手に検討の結果が書き込まれていた。

トイレにも風呂にも、川崎はいなかった。靴もない。

部屋に一人きり。こんなにも独りを実感したのは、初めてだった。

癖になりそうだった。

日差しが照りつけても、全然不快ではない。秋の沖縄は、何もかもがちょうどいい感じだった

。

また、来てしまった。

今度は、仕事のスケジュールをきっちりと確認して、一か月前からチケットを取った。宿も、美鶴に聞いた、旅人と会話しやすい安宿を取った。

空港に着き、まずはバスで北谷に向かった。那覇を抜け、海沿いの道を走る。

バスを降りると、左手にはショッピングセンターと大きな観覧車、右手には基地が見えた。

ホームページに載っていた地図のコピーを頼りに、宿を探す。左手に基地を眺めながら、海から離れて進む。屋根の低い沖縄の住宅と、芝生にぽつんと立った基地内の住宅の違いがとても印象的だ。

二階建てのほぼ民家、そこが今日の宿だった。

「こんにちは」

「あ、こんちは」

中に入ると、カウンターにキャミソールを着た女の子が座っていた。右手にはうちわ、左手には缶ビール。

「あの、予約してたものです」

「ん、はいはい。えっと、女性一人は……木田さん？」

「はい」

「じゃ、説明とかするから。あ、お金は前払いだから。一泊だから……2000円ね」

素泊まりでこの値段は、沖縄の安い宿では当たり前らしい。

「まず、こっち来てくださーい」

宿の中を色々案内される。後ろを着いていくが、短パンから赤い下着がはみ出て見えているのが気になった。

風呂場やトイレを案内された後、共同スペースに。そこでは何人かの若者がくつろいでいた。

「飲食はここでね。あ、こちら今日から泊まる木田さん」

「こんちはー」

「こんにちは」

みんな僕と同じぐらいの若さに見える。マンガを読んだりゲームをしたり、旅人とは思えないリラックス具合である。

そのあと、今日のベッドに案内された。二段ベッドが二つ並んだ奥の下、それが僕のスペースだった。

「ここ女部屋だけど、男入ってきたら叫んでね。私かオーナーが飛んできてぶち殴るから」

「はあ」

「じゃあ、なんか質問あったら聞きに来てくださいね」

むしろ女性と同じ部屋で寝る方が緊張するのだが、そんなことを言っても仕方がない。僕は荷物を足下に置き、とりあえず寝転がった。

前に来た時よりも、風通しが良かった。部屋も、心も。もやもやとしたものは抱えたままだけれど、沖縄を楽しめそうな気がした。

原付を借りて、思いつくままに走った。何となくだけれど、ガイドブックに載っていないようなものを感じたかった。

砂浜で泳ぐ人たちが見える。バーベキューを楽しむ人たちも。アメリカっぽいお店が並んでいて、現地の人、観光客、軍の人、いろいろな人が行き交っている。

空気が僕の中に入ってきて、色々なものをくっつけて出ていく気がした。まあ、気がするだけだ。本当は何も解決していない。

あの日以来、将棋と向き合えなくなった。研究もしないし、棋譜も並べない。対局も他の仕事も漠然とこなしてきた。引っ越したのに、会館にも行かなかった。人ともほとんど会わなかった。

自分のことが嫌いになる。

何かをしなければ、僕は何もかも失ってしまう、と思った。

女ならば。あのまますがりつけばよかったのかもしれない。

太陽が海へと落ちていく。

このまま走り続けたかった。何日かすれば、またここに戻ってくるのではないか。でも、そんなことはできない。

僕は感情を無にして、宿へと戻る。

色々なところを回って、那覇に戻ってきた。

いろいろな人に会い、語り、突然予定にないところに出かけ、泳いだり、走り回ったり。ひとり旅の дайご味を味わった。

それでも、僕は結局、同じところをぐるぐると回っていた。布団の中で瞼を閉じると、将棋のことを思い出した。

弱いけど、好きなんだ。どうしようもない。

国際通りをぶらぶらする。ごった煮になってはいるけれど、実は一番沖縄で薄味。お土産は他のところで買ったし、人込みは相変わらず苦手だ。

気づくと僕は、島崎さんの店の前にいた。暖簾は下りている。

「こんにちは」

「いらっしゃいませー。ん？」

中には、島崎さんしかいなかった。

「さくらちゃん？」

「はい。お久しぶりです」

島崎さんは、僕が座る前にカウンターに泡盛を注いだコップを置いた。

「一杯目はサービスね」

「一杯で帰るかしんないですよ」

「そんな時はお通し代千円ね」

「あ、お通しいらないです」

腰をかけると、肩から空気が抜けていくような感覚に襲われた。色々な場所を回ってきた結果、ここが一番落ち着くという不思議。

「なんか、変わったね。最初気付かなかったよ」

「髪切ったんですよ」

「それだけじゃなくてさ。大人っぽくなったっていうか。恋した？」

「惜しい。失恋」

「おっと、傷心旅行ですか」

僕は、島崎さんと他愛のない話を続けた。普段どんな生活をしているのか、将棋のプロってどんなものかも話した。島崎さんの恋の話、親の話、特技の話聞いた。

「沖縄来るとさ、なんかみんな三線したくなるんだよね。でもおんなじことやるの嫌だから、俺は太鼓やろうって。あの、エイサーで叩いてるやつ。でさ、じゃあやってみるかかって言った人が持ってきたのがウフデーケーって一番でかいので。二時間でやめたよ」

「そのあと楽器は何もしなかったんですか」

「うん。俺には向いてないなって。俺は、沖縄の酒に惚れたから、酒のこと極めよっかなって」

「それも楽しそうですね」

島崎さんが楽しそうなのは、誰とも競っていないからだ、と思った。自分のやりたいことを、やりたいたけやる。辞めたくなったら、すぐに辞める。仕事は、生きていくのに必要なだけやる。

。

僕の生き方は、全く違う。

思うことがある。僕より強い人がみんな死んだら、僕は強くなる必要があるだろうか。僕は強くなりたいのではなく、負けたくないだけではないか。

純粹に将棋を楽しんだのは、あの日までだった気がする。あの日以来僕は、彼の幻影を追い続けている。

「あっついぞー」

入り口から元気な声だ。

「おう、いいところに来た」

「え、いいところ？」

「久しぶり」

「……さくら？」

Tシャツに短パン、首にはタオルをかけている。まるで、我が家に帰ってきたかのような様子だ。

「また来ちゃった」

「どーしたの、髪切っちゃって。失恋？」

「みたいなものかな」

美鶴は、僕の横に腰かけた。

「すごーい。美鶴も沖縄に居ついちゃう？」

「うーん、連盟から交通費出ればいいけど」

僕は、バックから細長い箱を取り出した。それを、美鶴の前に置く。

「なにになに」

「会えたら、渡そうと思って」

「これ……あけていいの？」

「うん」

蓋を取って、美鶴は中身を取り出す。そして、棒状になっていたそれを広げた。まっ白いキャンバスに、黒い文字。

「これ……」

「私の扇子が出たんだ」

「美鶴の？」

「そう」

「……在心……って書いてあるの？」

「うん。なんか書けて言われてね、私の場合無心にはなれなくて、心在る状態で必死に戦おうって意味から。カッコいい言葉がよかったんだけど、思いつかなかったし」

「なんかいいと思う。それに、こうやって見ると木田桜っていい形の名前だよ。いいもんもらっちゃった、ありがとう」

「ううん、そんなものしかないけど。私こそ、ペンダントありがとう」

「いやいや、あんなものでよければいくつでも」

美鶴は、本当にうれしそうな顔をしてくれた。自分の作ったものを褒められるのは、誰だってうれしいものだ。僕も、あの二枚飛車を褒められると、自然と頬が緩んでしまう。

そして、彼女は気付いているだろうか。この髪も服装も、ペンダントに合わせて選んだということ。

「本当にさ、プロになるって大変だよ。私よりうまい人なんていくらでもいるんだから、びっくり。でもまあ、ただであげるにしてはいい出来かなって」

「ほんとに、これ気にいってるよ。それにね、プロって、維持するのが本当大変。アマだったら明日の対局さぼれるのになあ、って思うこともある」

「そうなんだ」

昔は出たいときだけ大会に出て、行きたいときだけ道場に行けばよかった。今僕はタイトルを取って臨時収入が確定しているし、もう少し夏休みを取ったってお金がなくなることはない。でも、タイトルを取れば対局も他の仕事も増えるのだ。明後日には対局がある。プロとして、指さない選択肢はない。

「美鶴も、いつかなんかのプロになったらわかるよ。なんかお婆さんの小言みたいになっちゃった」

「ははっ、お小言ありがたく頂戴しときます」

夜は長く、僕はその甘さに溶けていった。それでも、強く心に誓った。もう、ここに逃げない。この心地よさは、僕にプロであることの意味を忘れさせる。

深夜、宿に戻った。旅人たちはまだ起きている。僕はしばし、最後の余韻を分けてもらった。

驚くほど、気持ちは落ち着いていた。

純白のドレスに身を包んだ要さんは、いつもより魅力がないように見えた。花嫁という枠に収められたら、個性は輝かないのかもしれない。

そして。要さんが時折見せる、泳ぐような目つき。僕は、その理由を知っている。そして、その原因も察しが付いてしまった。祝福する人々の中で、一人だけ明らかに異なる顔をしている男がいた。緩んだ口元と射るような目つきで、新郎には目もくれず新婦だけを注視し続けている。

見たくなかった。中沢九段のそんな姿を、一生見たくはなかった。

凜として美しい対局姿。柔らかい物腰。そして何より力強くかっこいい指し手。将棋界にとって、これほどの柱はない、という人だった。定家四冠が強さの象徴であるとすれば、中沢九段は正しさの象徴なのだ。

それが。要さんにとっての「先生」だったなんて。思いすごしであってほしい。

けれども、残念ながら「女の勘」は鋭いのだ。僕の体は、確信している。

披露宴が終わり、二次会会場までの移動のとき。どうしても、前を歩く中沢九段のことを目で追ってしまう。要さんのあの時の言葉からして、二人はまだ関係を持っているのだろう。

中沢九段は師匠の弟弟子で、僕や要さんにとっては叔父のような存在だ。面倒はよく見てもらったし、将棋を教えてくれたこともある。けれども僕には、とても冷たい人に見えていた。ほとんどしゃべらないし、将棋以外のことは全くしなかった。テレビもラジオも、雑誌さえ全く見ない人だった。

独身のはずなので、要さんとの関係が特に不適切というわけでもないのかもしれない。だが、二人が恋人同士という姿は思い浮かばない。あの時、要さんは「先生」と呼んでいた。それが全てのような気がする。

僕の予測にすぎないし、事実だったとして首を突っ込むような問題ではない。けれども。僕の中で恐怖の感情が湧きあがってくるのだ。僕も、そのような対象として見られていたのだろうか、と。

狭い世界だ。僕だって、誰かの標的になったことはある。その度に、悲しくなるのだ。勝負の世界で、それ以外のものを求めてどうするのだ、と。そして反省する。僕は要さんに対して、何を求めていたのだろう、と。

この世界以外のことは知らない。だから、この世界が他と比べてどうなのかもわからない。それでも、なんとなく、不思議な世界なんだと実感する。

地下鉄を乗り継ぎ、また少し歩く。二次会の会場は、地下のおしゃれなバーだった。こういうところは少し居心地が悪いうえに、目の前には知らない人が。そもそも新郎が将棋関係者でないので、会場の半分は別世界の人間なのだ。

「木田さん……ですよね」

向かいに座った男性が声をかけてきた。長くウェーブした茶髪、きらきら輝くブレスレット。まあまあの顔立ちだが、自己メンテナンス方法が僕らとは少し違う世界のお方のようなようだった。

「はい」

「見ましたよ、ニュース。タイトル初挑戦で初獲得、すごいですねえ」

「ありがとうございます」

注文していたジントニックが届いた。男は乾杯しようとするそぶりを見せたが、僕は気付かないふりですぐに口を付けた。

「あれ、お酒飲めるの」

「好きですよ」

「いや、もっと若いのかと思って」

「まだまだ幼いんですよ」

司会が何やら話しているが、ざわついていてよく聞こえない。ゲームが何やらかんやらということらしいが、興味がない。何となく会場を見渡し、かわいい女の子を探す。二次会は出会いの場だと言うけれど、今の僕には眺めるだけで精いっぱいだ。

結婚式というものは、新郎新婦は大忙しで、二次会でもテーブルを練り歩き挨拶をして回っている。僕らのところにも来たが、新郎の落ち着いた表情に比べ、新婦のいかにも幸せですという顔が痛々しかった。要さんはいつでも頑張りすぎる。そこに付け込まれるということも、あるはずだ。

面倒くさい。色々と。

トイレに立ったついでに、席を移った。普段はあまり仲良くしているわけではないけれど、それでも女流棋士の輪に入ると落ち着いた。僕は、この世界の中で何とかやっていく方法は、身につけていたようだ。

二次会が終わり、もうこれで役目は終わりだ、と思った。早くこの息苦しい正装から解かれたい、というのが僕の気持ちだった。

「木田さん、この後予定どうなの」

けれども、すんなりと日常に帰ることはできなかった。先ほどの茶髪が、話しかけてきた。

「予定は……」

「ああ、木田君。一門で集まる話だっただろ」

「中沢先生……」

いつの間にか隣にいた中沢九段が、僕と男の間に割って入っていた。男は何か言いたそうだったが、中沢九段の貫禄の前に引き下がった。何事もなかったかのような顔を作って、去っていく。

「ああいうのと付き合ってちゃいかんよ」

「いや、私は別に……」

「君は一流の実績を作ったんだ。一流の振る舞いを見せて生きていかなければならない」

「……はい」

その姿は、棋士の鑑だった。やはり凜としていて、ブレが感じられない。そう、これが僕の見たいいつもの姿だ。

「先生」

「何だね」

「先生は、結婚しないんですか」

僕は、確かめたかった。中沢九段の、尊敬される棋士の実態を。

「ははは。まあ、僕は家庭を持ってない人間でね。浮気的な女が好きなんだ」

「それは意外です」

「ははは。もちろん、そんな風には見せていないから。僕も一流と呼ばれていた時があるから」

「今でも大活躍なさってるじゃないですか」

「いや、僕は五段に負けるような男ではなかったんだよ」

胸に突き刺さってくる言葉だった。本当は、この人はプライドの固まりに違いない。そして、それは女性と幸せな家庭を持つのに邪魔になるだろう。

要さんとの関係とか、そんなものはどうでもよくなった。この偉大な棋士に、将棋以外のことを求めても仕方がない、とすら思えてくる。

「でも、五段の頃の先生はすごい強かったでしょう」

「そうだね。あの頃は勢いがあつた。川崎君もこの先活躍してくれれば、僕も救われるわけだ」

色々とむなしくなった。何人かに三次会を誘われたが、全て断った。何となくだが、海に向かおうと思った。

東京湾は、まっすぐで狭い。

沖縄の海を見てきたからだろうか。同じ海だというのに、全く違うものを感じる。

それでも、嫌いではなかった。

山の中で長い間過ごしたので、海というだけで最初ははしゃいでいた。押し寄せては引いて、それを繰り返す波。流れ去り下っていく川とは全く違う水の様相に、僕はひどく感動したものだ。

防波堤に何度もぶつかり、それでも決して動きをやめない。意味や目的などではなく、意地を張っているかのようだ。

結婚式の後にはむなしい。自分は絶対できないだろうし、むなしい。

ポケットの中で、携帯が震えた。メールが来ていた。

川崎からだった。

タイトルはなかったし、本文も短かった。

「今度はそっちが先手ね。じゃ、一手目どうぞ」

唐突過ぎて、吹き出してしまった。僕にとって大事だと思っていた彼との再戦が、一回目は泥酔状態、二回目がメールだなんて。

僕は、深呼吸してから、その場に正座した。携帯電話を地面に置き、「お願いします」と一礼してから、ボタンを押す。

「初手私 7六歩」

膝がゴリゴリとして痛かったので、正座はすぐに崩した。風が耳の後ろを通り抜け、髪を崩していった。

五分後、返信が来た。

「二手目俺 三四歩」

気が付くと僕は、声を出して笑っていた。こんなこと、もっと早くできたじゃないか。川崎は、何故今、こんなことを始めたのだろう。

それでも、僕は楽しいから、川崎は正しかったのだろう。

何の指定もないから、次の手はすぐに返さないでおこうと思った。このゲームみたいな対局を、必死に考え抜いて戦おう、僕はそう誓ったのである。

それは、突然過ぎた。

夏になると、いくつも将棋祭りが開催される。若手女流棋士はどここの会場でも重宝される。特に今年はタイトルを獲ったということもあり、僕の出番も多かった。

将棋祭りの楽しみの一つは、普段実現することのない対局が席上対局で実現するということところにもある。たくさんのお客さんの前で指し、解説の声も聞こえるということで、自然と対局も魅せることを意識した内容になる。

僕も関西の先生との対局で、勝敗は気にせず楽しく指しているところだった。お客さんの様子も見ながら、盛り上がりそうな手を選ぶのも大事だ、と先輩には言われた。だから、時折会場を見回していた。子供も結構いるが、やはりおじさんが多い。

いつもの光景だ。そう思っていた。しかし、ある一人のおじさんの姿を見て、そこから視線を動かさなくなってしまった。青いジャンパーに身を包んだ、白髪が目立つ、五十過ぎの男性。僕の知っている姿からはかなり歳を取っていたが、間違いなくそれは父の姿だった。

十年ぶりの再会が、こんな形になるなんて。僕は動揺を隠し、何とか対局の方に集中しようとした。対局はできているが、どこかふわふわしてしまった。

対局は、僕の負けだった。けれども、そんなことはどうでもよくなっていた。再び会場を見回した時には、父の姿は見つからなかった。

将棋に全く興味のない父がここに来た理由なんて、たった一つしか思い浮かばない。おそらく、僕がプロになったことすら最近まで知らなかったのだろう。そしてニュースか何かで見て、娘の現状を知ったに違いない。そして僕がまだ「木田」を名乗っていることも。

追いかけて行くほどの未練は何もない。泣くほどの感動もない。それでも僕の心は、平静ではいられなかった。

僕の半分は、あの人でできている。

見なければ、どうだっていい存在のままだったのだ。それが、僕を気にかけているなんて思ったら……

人生には波がありすぎる。ああ、もう……

意地で、盤上には並べなかった。メールの履歴だけが、勝負の舞台だと思った。

中盤を過ぎ、局面は複雑を極めている。相手は一直線の勝ちを目指してくるだろう。だからと言って受けだけの手を指してはいけない。より複雑に、予測のできない局面に引きずり込む。うんざりするような、そんな状況に。僕は、それが好きなのだ。

一筋の光が頬を打ち、はっとしてカーテンを開けた。朝になっている……。どうやら僕は一晩かけて、次の一手を考えていたのだ。

ベランダに出て、外を見る。太陽はまだ出たばかりで、ふらふらとしているようにも見えた。ジョギングをしている人や、ゴミを出している人、もう出勤をする人。こんなに早朝だというのに、案外人びとは活動的だ。

最近、部屋にもものが増えた。誰か来るかもしれないと思うと、見た目が気になってきたのだ。

テレビを買った。コンポも買ってみた。積みあがっていた雑誌をラックに入れてみた。

そういえば、僕は自分の部屋をどうにかしたことがなかった。子供部屋にはいつも、樹の好きなものが置いてあった。僕は何かをねだることがなかったし、お小遣いもほとんど貯めていた。唯一、将棋にだけはお金を使った。こっそりと買った盤と駒、棋書。そして道場代。後から知ったことだが、小学生は百円、というのは師匠の嘘だった。

自分のしたいようにする、というのがこんなに難しいことだとは知らなかった。そして、こんなに楽しいことだとも。

「六十三手目 4八銀打ち おはよう」

「どうだっ」

「何それ」

いつも通り急にやってきた樹は、靴を脱ぐなり鞆からTシャツを取り出した。白地に黒く細い線がごにゃごにゃと書きこまれている。森のような湖のような、よくわからない絵だ。

「俺のデザインが採用されたんだよ。全国で発売！」

「何円」

「2880円」

「買わない」

「いや、売りに来たんじゃないで」

「自慢しに来たの」

「当たり前」

相変わらず家にはあまり帰っていないようだが、樹も彼なりに将来を見据えて生きているようだった。僕の家に来て食糧を持ちかえるようなこともなくなった。

「それにしても、変わったね」

「部屋？」

「うーん、それも含めて」

「まあ、お金もあるしねー」

「うわー、やな女」

その時、メールが鳴った。これはおそらく、着手の着信音だ。

「あっ」

「なに、デート誘われたのか」

「もっと嬉しいこと」

そこには、僕が最も待ち望んでいたことが書かれていた。樹がいなければ、叫んでいたかもしれない。

「投了 負けました」

心地よかった。もちろんただの練習将棋にすぎない。対局の多い川崎の方が時間的な不利もあっただろう。それでも一局の将棋に勝ったこと、あの川崎に勝ったことがとても嬉しかった。

「なんか食べにいこっか」

「おごってくれるの」

「任せなさい」

肩がとても軽くなった。返信文を送る。

「ありがとうございました。 ありがとう」

実感。

驚くほど負けなかった。

そんなに頻繁に対局があるわけでもないのに、自分でも気付いていなかった。しかし、僕は勝ち続けていた。今日勝てば、二回目のタイトル挑戦。もしタイトルを取れば、二冠と二冠、本当の意味で女流のトップになれる。

対局の朝だというのに、全く緊張しなかった。自信があるというわけではないが、勝負の結果については全く興味がなかった。多分、僕はこの先何度かこういう大事な対局を迎える。これは、そのうちの一つにすぎない。

相手は外野女流三段。タイトル経験もある、中堅の先生だ。かつて対局したときは、終盤にびっくり返されて負けた。何があっても顔色を変えず、淡々とミスを待つタイプの将棋。若手は、その余裕に惑わされる。

人が多いのが気になった。長年女流棋界では、同じ世代がタイトルの多数派を占めていた。もし僕がこのタイトルを取ることであれば、久しぶりに世代交代が起こるきっかけにもなるだろう。外から見れば、それは非常に興味のあることのようにだ。

僕は、自分が一番になりたいだけだ。相手の世代なんて、気にならない。

僕が入室すると、まだ外野三段は来ていなかった。少し迷ったが、上座に腰を下ろした。温かいお茶の入った水筒を二本、鞆から取り出した。

数分後、外野三段が部屋に入ってきた。びっくりした。和服だった。

紫地に、薄い桃色の花が描かれた、とても美しいものだった。同じ部屋にいた先生たちも見とれている。

僕は、黒と白のチェニックブラウスに水色のロングスカート、とても地味だった。

外野三段はちらりと僕の座っている座布団を見てから、一礼して下座に腰かけた。僕に対しては一切視線を向けなかった。赤い唇、白い肌、長い睫毛、全てが美しかった。

僕は、少しずつ事の重大さを飲み込み始めた。外野三段にとって、チャンスは何度もないのだ。そして、倒さなければならない相手は、今まで彼女を負かしてきた相手ではない。今からすぐに、気合が入るものでもない。僕は、将棋に勝つことを考えるしかない。歩が四枚出て、先手になった。急がないように、焦らないように。僕は、自陣の駒を一つ一つ眺めた。

王将が、小さく見えた。

窓の外を見ると、雨が降り始めていた。傘を持ってきていない。

湿気の多い日は、駒が重たい。7七にある歩を何度かつついた。そして軽く持ち上げ、1マス前に進める。駒が盤に吸い込まれていくようだった。

奥歯が痛んだ。どうにも、乗れない。

昼食を食べ終わった後、鏡を見つめていた。

特に華がある顔ではない。勝負師のにおいはしない。

対局をなめ過ぎていた。簡単に勝てる将棋を、簡単に勝ちすぎた。内容はまだ互角だが、完全に僕は吞まれていた。

鏡の中に、背広が映った。振り返ると、定家五冠(最近新たにタイトルを獲得した)がいた。

「木田君。その顔では勝てないね」

「え……」

「君の頂は、終わってしまったのかな。到達者の顔をしているよ。私もまだ到達していないのに」

「……」

「君の将棋には、粗削りだが先に進もうという姿勢が感じられる。でも、今日の将棋はどうだろう。下界を眺めてまどろんでいるようだ」

「……」

「つまらない将棋に価値はない。それは男も女も、棋力も関係ない。プロならば、自分の枠にとられないことをお勧めするよ」

それだけ言うと、定家五冠は控室を出て行った。

奥歯が痛いわけが分かった。唇は緩んでいるのに、奥歯は噛み締めていたのだ。いつもとは全く違う意味で、心と体が一致していなかった。そして、超一流は下っ端のそんな状態など一目で見抜いてしまえるということを知った。

それでも、心の奥歯は噛み締められなかった。

覚悟をした。この将棋は、次の一手で決まる。

夕方、少し日差しが戻っていた。駒も軽くなっている。

僕の細かい攻めがぎりぎりつながり、相手玉に受けがなくなってきた、かに見えた。しかし、

歩切れの僕は大駒での王手に対して逃げるしかない。合い駒をすれば受けられるが、それでは攻めが完全になくなってしまふ。逃げて逃げた先に、王手と金取りがかかる。取られるのは歩一枚だが、こちらにとっては大事な攻めの拠点だ。と金を取られて投了なんて、それは惨め過ぎる。

だから、角で王手されたら投了するしかない、そう思っていた。もう駄目だ、そう思っていた。

けれども、次の一手はなかなか指されなかった。外野三段の左のこめかみから、汗が流れている。眼は血走り、口は空いたままだった。そして、右手が桂馬をつまんだ。桂馬のただ捨てから詰みそうな筋があるのだが、途中もらった桂馬を合い駒して詰まない順があることはすでに読んでいた。桂馬で詰めろをかけても、王手王手で上部を開拓していけば詰めろは解ける。

相手も焦っている。確かに、完璧に指し続けられるならば、もっとタイトル戦に出られるはずなのだ。

もう僕は、待つしかない。多分、どの手を指されてもこちらが間違えるということはないだろう。

その時、偶然外野三段と目があつた。しまった、と思ったが遅い。おそらく僕の顔色から、自分が負ける筋があるのを感じ取ってしまったのだろう。外野三段は、桂馬から指を離した。

到達者のまどろみ。確かに、そうだ。

駒台の角が、摘みあげられた。僕はお茶を口に含み、唇をなめた。

角が、遠く王将をにらむ。

「負けました」

その瞬間、視界が開けるのが分かつた。下山を覚悟したときに、初めてもっと高い山のことを考えることができるのだろう。

単純なことをしてみようと思った。

朝六時に起きて、コーヒーを飲んだ。そして体操をして、少し休む。詰め将棋を十問解いたらトーストを焼き、朝食。十時からは自転車で一時間ほど外出。買い物をしたり、公園に行ったり。

帰ってきて、ネット対局を二局指す。負けても二局で終わる。

昼食の後は読書。今は樹からもらった小説を読んでいる。樹は絵だけでなく芸術全般に興味があるようで、持っている本の数も桁外れだ。もちろん二桁の僕に比べて、だが。

文字ばかりの本は疲れるが、将棋から頭を切り離す時間も必要だった。将棋のことを考えていると、それだけで強くなっていく錯覚に陥る。頭自体を鍛える時間を作りたかった。

夕方は、気が向けば将棋会館に向かう。そうでないときは、研究をする。時折昔の先生の全集を引っ張り出して、盤に並べる。その時見える絵を、頭の中に焼き付ける。

高く険しい山に、近道などない。そんなことは、わかっているつもりだった。それでも意識してみると、僕にはまだまだできることがあった。

定家五冠は、僕の中に何を見たのだろうか。女流としての可能性か、それ以上のものか。それともただ、からかっただけなのだろうか。

夜、十時には布団に入る。そして、将棋には関係のない夢を見るのだ。

師匠が入院した。

最近では体調を崩すことが多く、しばらく様子を見るための入院だ、と奥さんは説明してくれた。本当かどうかは分からない。

病室のベッドに寝る師匠の姿は、本当に普通の老人だった。勝負師は勝負をやめると、一般人に戻れるのだろうか。

「なんかいるものありますか」

「酒もたばこも止められとるからなー」

「人生の前半で飲み過ぎたんですよ」

「ははは。後半の分も取っとくんやったね」

声は少し細くなっているが、それほど弱っているわけではなかった。

「お久しぶりです」

聞き覚えのある声だった。振り返ると、そこには小ぶりのスイカを持った中沢九段がいた。

「おお、中沢君」

「思っていたよりお元気そうですね」

「なんだ、死にそうだとでも思ったのか」

この二人は、いつも平坦に語り合う。長い長い戦友なのだ。

「木田さんも大活躍ですしね。師匠としては嬉しいでしょう」

「ははは。この子はもっとできるよ」

「そうですね」

十分ほどして、中沢九段は「では、そろそろ」と言って部屋を出た。僕も「じゃあ私も」と言  
って、そのあとに続いた。

「そういえばこの間」

少し後ろを歩く僕に、中沢九段は振り向いた。

「はい」

「結婚のことを聞いたけれど、君はどうなんだい」

「私ですか。私は相手がいないから」

「そうなんだ。でも、言い寄ってくる男はいるだろう」

「いないですよ。ネクラなんです、私」

「そんなことはないだろう」

「好きな人はいましたけど」

何故そんなことを言ったのか分からない。いや、原因は分かっているのだが。

「ほほう」

「その人、結婚しちゃいました。しかも、他にも相手がいたみたいで」

「ふうん。それは大した男だ。しかし君も浮気性な人が好きなのもかもしれないね」

そりゃあ、同じ人が相手なんだもの、とは言わなかった。中沢九段と自分の似通っているところ  
を感じて、少しむなしくなっていた。

「でもいいんです。恋して将棋が強くなるわけじゃないですから」

「なるほど。そういう考え方もあるか」

それきり、中沢九段は黙り込んでしまった。恋について、真剣に悩んでいるのかもしれない。

病院を出て、中沢九段はタクシーに乗った。僕は、地下鉄だ。

去り際、彼はこう言った。

「でもね……恋はしたいよ」

ニヒルなような、恰好悪いような。走り去るタクシーを見ながら、自分には母性本能がないこ  
とを確認した。

「これはいかん……」

普段ふざけてばかりの先生が、モニターを見て呟いた。僕らも言葉を失った。こんなことが…

…

挑戦者リーグ戦最終戦。この対局に勝てば、川崎は紅組一位で挑戦者決定戦に進出という大事  
な一局だった。

序盤から積極的な動きを見せた川崎は、見事な指し回しで優位を拡大していった。あとは仕上  
げるだけ、誰もがそう思いあまり検討していなかった。

しかし、突然局面は乱れ出した。飛車取りを放置して寄せに行ったが、なかなか詰めろがかか  
らない。取られた飛車が攻防に利く位置に打ちおろされ、川崎の方が受けに回る展開になっ  
てしまった。しかし相手も時間に追われ、自陣に手を戻したりと流れが落ち着かない。時間は零時

を回り、泥仕合の様相を呈してきた。

「こりゃ、わけがわかんないな」

「川崎君、焦ってるね」

もう、最善手がどうこう言う人間はいない。こうなると、大悪手を指さない方が勝つのだ。終電の時間は過ぎている。控室に残った人間は対局と心中する覚悟だ。

画面の中で、川崎の手が震えていた。指し手もなかなか伸びてこない。何を恐れているのかと思ったが、だんだんと僕にもわかってきた。

川崎は、頂点へと伸ばした手を、完膚なきまで叩き落とされた。タイトルに一度だけ挑めた者になるのか、常連になるのか。その差は果てしなく大きい。今川崎は、多くの若手が蹴落とされてきた関門へと挑んでいるのだ。一度表舞台に立った以上、善戦では意味がない。

端の方でごちゃごちゃした戦いが続く。とりあえずどんな駒でもいいから打ち合っている感じだ。一分将棋に突入し、継ぎ盤の検討も追いつかなくなってきた。いつの間にか皆正座してモニターを見つめていた。

次第に、川崎に勝ちがないことが分かってきた。手持ちが桂二枚、玉頭の戦いには向かない駒だ。両取りの筋も見つからない。

一時過ぎ、ついに川崎の玉に受けがなくなった。

川崎は負けた。順位の差でリーグ二位。挑戦者決定戦には出られない。

二時前。感想戦が終わった。

勝者も敗者も疲労困憊といった様子だったが、川崎は意識的に笑おうとしていた。それが、余計に悲壮感を感じさせた。

「木田……こんな時間までいたのか」

「川崎のせいだよ」

将棋会館を出て、二人並んで歩いた。電車はもう、とっくにない。

「あれ勝てなきゃ、しょうがないよなあ」

「川崎」

「ん？」

「お腹すいてない？」

「ああ、そういえば」

「おごるよ。この前のお礼」

「あ……ああ」

僕は、川崎を連れて夜もやっているファーストフード店に入った。若者やサラリーマンなど、深夜だが案外お客さんがいる。

「好きなの頼んで」

「一年ぶりぐらいに来たよ」

二人ともセットを買い、二階へと上がった。奥の二人がけのテーブルに、向かい合って座る。「なんか変な感じだね。飲みに誘われることはあるけど」

「二人とも、あんまりお酒飲むのは上手じゃないみたいだし」

「俺は……まあ、そうかな」

それからしばらく、二人は黙々とバーガーやポテトを食べた。将棋を指していた人はもちろん、見ていた方も案外エネルギーは使っているのだ。

「悔しかったよ」

川崎は、コーラを口に含んだ後、そんな言葉を吐き出した。

「さっきの？」

「いや、木田との将棋」

「え、あれが？」

「途中までこっちが良かったと思うんだ。時間もあつたし、勝ちたかつた」

僕は、思わず吹き出してしまった。あんな大事な勝負に負けた後に、この人は何を言っているのだろう。

「いつでもリベンジの機会は受け付けているんだよ、君」

「……今はやめとく」

「ほほう、私を恐れてるわけね」

「……木田」

「何」

「……やっぱ、今はやめとく」

僕も、アイスコーヒーを口に含んだ。

こういう時間を、今まで過ごしたことがなかった。そして、川崎とこんな時間を過ごせるようになるなんて、想像したことがなかった。

「私ね、ずっと悔しかった」

「何が」

「奨励会」

「……そうだね」

「でも、今から思うとやっぱり力が足りなかった。そんな私にもチャンスがあったのは幸せだったのかも、って思う」

「うん、木田は強くなってるよ。きっと、まだまだ勝っていく」

「いつか、挑戦するから」

「ああ」

あの日から変わらない想いを、純粹に持ち続けていく自信を持てそうだった。どれだけ川崎が高く昇って行こうと、僕も同じ頂を目指していけばいい。そして川崎も、どこかで腰かけ休んでいる。いつか追いついたら、二人で登っていく事もできるだろう。

「……楽しそうだな、それ」

「え」

「俺と木田のタイトル戦とか。まあ、木田の方がタイトル戦は慣れてるのか」

「もっと慣れるよ。女流は、全部獲る」

「いい顔だな。うん、俺も全部獲ろうかな」

二人で、大きな欠伸をした。とても幸せな、ビバークだった。

外野三段が完膚なきまでに負ける姿を確認して、少し嬉しくなった。意地が悪いのかもしれない。しかし、峰塚三冠に諮ってほしいのだ。たまたま衰えてきたときに僕がタイトルを獲ったと思われるのは、嫌だ。

ブラウザのタブを閉じて、しばらくボーっとした。このままずっと、こんな感じなのか、などと考える。全てが中途半端で、心地よかったり、苦しかったり。

タイトルを獲って、僕は次の目標を見つけなければならないのだ。出来るだけ、実現可能なものを。残りのタイトルを全て獲るとか、男性棋士から一勝を上げるとか。きっと、頑張れば何とかなる範囲のこと。けれどもその次はどうすれば、とってしまう。川崎は、本気ではないだろうが、二人でタイトル戦を、と言ってくれた。定家さんも、まだ先に進めると言ってくれた。私は一人で戦っているのではなく、将棋界の中で期待されてもいるのだ。

けれど。僕が目指していたのは、そんなことだっただろうか。沖縄に行ったとき感じた、一瞬透明になる感覚。あれは、僕自身が偽り続けてきた想いを、剥ぎ取られた瞬間だったように思える。

子供の時のの方が純粹なのは、痛みを受け入れられるからだ。負けても負けても這い上がろうとする時の痛みを、耐えられるからだ。けれども大人になって、多くのことに気付いてしまう。痛みにも耐えられず、まどろみを選んでしまう。

ビバーク。立ち止まり過ぎると、そこから抜け出せなくなってしまう。誰かが負けるのを見て喜んでいても、僕だけのこの問題は解決なんてしない。

化粧台の前に座り、じっと自分の顔を見つめた。何年も、共に過ごしてきた。女性であることの全てが嫌だから、どこがどうだったとか、思ったことがなかった。もう少し顎が細かったらとか、もう少し瞳が大きかったらとか、もう少し眉毛が細かったらとか。むしろ整った部分さえ傷つけるように、僕は汚い女を塗りつけようとしていたかもしれない。けれども、今冷静になって向き合っていると、それは何と言うあさはかなことだったろう、と思うのだ。僕は向き合いたくなかっただけだ。男とか女とかではなく、その顔を他人と思いたかっただけだ。

「初めて出会った」

無意識に呟いていた。口は笑っているが、両目から涙が流れていた。鏡の中のその表情に驚いて、僕は自分の顔を撫でた。鏡の中の顔も、細くて白い手に触れられていた。

狭い狭い意識の中で、いつももがいていた。この心と、この体のこと。けれどもそれは、その二つが対立しているとの思い込みだったのかもしれない。樹の言葉を思い出す。体は体で欲しているもの。それは決して、女になりたいとか、そんなことだけじゃなかったはずだ。

将棋を強くなりたい自分と、男になりたい自分。それを重ね合わせたり、混ぜ合わせたり。けれども結局、将棋では中途半端だし、男にもなれない。だから、女である自分と、女流棋士である自分の中でまどろみ続けている。

この苦しみは、今の自分が居場所を得てしまっている苦しみだ。このどっちつかずの状況でも、僕は何とか生きていける。もがいてもがいてたどり着いた場所なのに、それとは関係のないと

ころで、僕の心を支えているものがある。

この感情には、名前を付けることができないだろう。名前を付けてはいけないのだ。

上着のボタンを外した。肩が空気に触れる。小さくて、弱々しい骨格。ブラのホックも外す。露わになる、曲線。これを直線にする夢を何度も見たけれど、本当にそうしようと思ったことはなかった。僕は一度でも、無理矢理に変えてしまおうとしたことはなかったのだ。

綺麗だった。僕の体は、綺麗だった。

それは、誰のものだろう。僕はずっと、いらないと思っていた。けれどもこれがなければ、僕は将棋を続けられなかったのだ。

隠れ蓑にしながら、嫌っていた。

両手で、胸を包み込んだ。温かさを感じているのは僕で、与えているのは僕だ。

唇を右手の指でなぞった。左手で乳房を撫でた。心に近い部分まで、僕の体は僕を感じることができた。この手が僕以外だとしたら、どのようになるだろうか。

灯りを消した。僕だけでなく、世界から目を逸らしたかった。

そこに特別な意味があるとは思わなかった。

しかし、仕事でサインをたくさん書いているうちに、違和感を覚え始めた。自分の本名ではない、その名前。この名前を選んだときは、意地を張っていた。けれども先日父の姿を見て、後悔した。僕は父に対しての想いはほとんど持っていない。母に対する怒りや恨みが、木田と名乗り続けることを選ばせたのだ。

「樹」

「うん？」

相変わらず食事をたかりに来ている樹に、声をかけた。雑誌を読んだままで、返事をよこす。

「今の名字、気にいってる？」

「名字？ 気にしたことないなあ。気になるんなら、芸名でも考えたら」

「そう……」

偽りの姓、偽りの性。いや、何が本当かなんてのもわからない。

「なんか最近、悩み過ぎなんじゃない？ 将棋頑張れば、吹っ切れるのかと思ってたけど」

「うん……そう思ってた。違ったみたい」

「悩み事増やして行ってどうすんだよ。気付いたら孤独なばあさんになってるぜ。……なんか、そこら辺は打開できんのかと思ってたのに」

「打開？」

「……ああ、そうだ。料理しろよ、料理。時間があるのに、こんなきれいなキッチンもったいね一だろ。まさか女らしいからやらないとか言わないだろ」

「急になんだよ。料理なんかして何か変わると思ってるわけ？」

「やってもみないで何も変わらないと思ってるわけ？ ちょうどいいから、教えてもらえよ」

「え……」

そう言うなり、樹は黙り込んで雑誌の方に集中してしまった。

「教えてもらおう……」

その意味を考えて、少し戸惑った。僕にはそもそも、何かを習えるほどの親しい人は少ない。絵ならば樹に習えるだろうが、彼は料理が得意なわけではない。

となれば……

樹は、どこまで考えているのだろうか。疑問に思っても、僕にとって彼は、世界で最も信頼できる人間なのだ。

「頼んでみようかな」

僕は、携帯を手にとった。

手続きのような対局がある。

序盤から、必ずどこかおかしい。挽回するための直接的な悪手。見苦しい、可能性のない迫り方をする終盤。どうしても負けようがないのだ。考えるのではなく、対応するといった感じの対局。何度でも同じ負け方を繰り返し、棋譜に全く価値が生じない対局。

この人は将棋が楽しいのだろうか、と思う。勝たなきゃ楽しくない、なんてことはない。けれどもプロとしてこの世界に在籍して、これだけ力の差を見せつけられて、いつまでも同じ過ちを繰り返して、お前は何なんだ、と思う。

けれども、それは横暴な考え方でもある。男性棋士から見れば、僕だって同じなのだ。プロと言うには、弱すぎる存在。五十歩百歩。

と、こんな余計なことを考えていても、結局は二手差で勝ってしまうのだ。

味気のない感想戦。定跡を知らなかったのだから、こうした方がよかったもくそもない。何も生まれれないのだ。

まだ、外は明るい。約束の時間までは随分とある。

他の対局も続いていたが、控室にも寄らずに会館を出た。仕事をしたという実感が無い。こうしている間にも、もっと強い相手と対局している人がいる。今日は、そういうことを忘れていたい。

家に帰り着くと、ちょうど樹が出かけるころだった。今回もかれこれ三日連続でうちにいる。

「あ、早かったね」

「うん」

「じゃ、合コン行ってくるから」

「そう、行ってらっしゃい」

親や彼女と折り合いが悪くなると、当然のように僕のところに来る樹。それでも一度出かけると、そのまま戻ってはこないことが多い。

部屋の中は綺麗なままだ。そしてキッチンには、出かけるときにはなかった食材が置かれていた。大根やトマトといった野菜から、こしょうやコンソメといった調味料、そして見たことのない綺麗な瓶に入ったお酒。どう考えても、樹が用意してくれたものだった。

弟に、何度救われるのだろう。

自分で用意していたものも加えて、今まで見たこともないほどの食材が並べられた。なんかすごく気合が入っているみたいに見えたので、恥ずかしくなって半分ぐらい片付けた。

六時過ぎ。チャイムが鳴った。

「はい」

扉を開けると、パンパンに膨れ上がったエコバッグを抱えた川崎がいた。

「ちょっと、その量……」

「木田のところさ、何にもなかったじゃん。この機会にと思って」

思わず吹き出してしまった。川崎はきょとんとしている。

「ありがとう。入って」

いつもと、何かが違うと思った。それが何なのかしばらくわからなかったが、川崎の腕にキラキラとしたものが見えてわかった。今日の川崎は、いつもよりおしゃれをしてきている。髪も少し立てられているし、上着と中のシャツも色をそろえているようだ。かつて僕がそうしたように、ちょっと無理をしたおしゃれ。

「あれ……違うね」

川崎は部屋の中を見回している。以前の殺風景な様子からの変わりように驚いているようだった。

「普通の生活にあこがれ始めたの」

「そりゃ、棋士にとっちゃ無謀な試みだね」

川崎は腕まくりをして、野菜を洗い始めた。ざるやボウルを用意するのを見るだけで、僕とは大違いだ、とってしまう。

「何作るの」

「パスタにしようかと。木田が真似できなきゃ意味ないしね」

そう、今日の目的はおいしいご飯を作ってもらうことではないのだ。

「まずは、お湯を沸かして」

川崎の指示に従って、鍋を火にかけたり、野菜を切ったり、ソースを作ったり。川崎の言葉は威圧的ではないが、甘やかすわけでもない。いい指導者にもなれるんだろうな、と思った。

「なんで塩入れるの。味付け？」

「沸騰する温度が上がるから……だったと思う」

「へー」

勝手に川崎は一日中研究しているものだと思っていたが、話していると全然そんなことはないのだと分かってくる。料理もすれば、読書もする。野球観戦や、釣りや、サイクリング。将棋だけが人生ではないのだ。

「気付いたら、将棋が一番大事だった。そんなところかなあ」

幼い日の、初めて出会った時の川崎の姿を思い浮かべた。あの時の僕には、ただひたすら強くて、将棋の神様のように見えていたのだ。しかしプロの世界に関わるようになって、もっとももっとすごい人がいっぱいいることを知った。強い人ほど将棋に熱心だとは限らないが、本当に将棋だけに情熱を注ぎ続けている人は実在するのだ。

川崎は、普通の男性としても生きている。それは、僕にとってはまさに羨ましいことだ。

「木田はどうなの」

「え」

「木田にとって、将棋ってなに」

言葉に詰まった。多分、本当のことなら言葉にできる。けれどもそれは、もっと深い部分へと続く導火線に火を点けることになってしまうかもしれない。その決断には、躊躇せざるを得ない。

「私は……頼ってる」

「将棋に？」

「うん」

ピーー、とやかんが音を立てた。川崎は、紅茶を用意している。

「木田は、なんか、そういうのはなさそうに見えるけど」

「そう？」

「何となく……だけど、将棋そのものと戦ってるように見える」

料理をテーブルに運んだ。パスタにスープ、そして紅茶。自分の家ではないみたいだ。

「ありがとう。なんか、新鮮」

「これだけで？ もうちょっと頑張ろうぜ」

川崎と向かい合って座る。初めてのことでないが、これまでとは全然違う感じだった。これまではまだ、川崎のことは将棋を通してしか見ていなかった。けれども今目の前にいるのは、僕の我がままにつきあってくれて、僕を励ましてくれて、僕に優しくしてくれる一人の男性だ。

「木田って、本当に料理しないんだな」

「うん。全くだよ」

「ちょっとは謙遜してるのかと思ってた」

「しないよ。私、だらしない女だから」

パスタはおいしかった。それは、ほとんど川崎が作ったようなものだ。

遠い昔の声が聞こえる。女の子だから、料理ぐらいできなくちゃね。桜ちゃん。

元々は、そんなでもなかったのだ。けれどもいつからか、「女らしいならば」したくないと、そう思うようになったのだ。とりあえず今日のところは、料理をしているとき楽しかった。

「ずっと不思議だったよ。初めて対局したとき……小学生のとき。こんな子が将棋指すんだ、って思って。しかも決勝で当たってさ。お互いプロになって……不思議な感じする」

「川崎に負けてなかったら、プロ目指さなかったかもしれない」

川崎がフォークを止めた。僕のことを、じっと見ている。

「俺？」

「……だけとも言えないけどね。原因の一つ。大きな原因」

「そっか。なんか、くすぐったいな」

言葉が、心から直接紡ぎだされていた。言うなら今しかない。何故そう思うのか。苦しかったからだ。僕の中で隠匿されていたものは、ずっと外の世界を待ちわびていた。それを受け止めてくれるとしたら、川崎しかいないのだ。

「あの、さ」

「なに」

「私……この世界なら、この世界で強くなったら、楽になれるんじゃないかと思ってた」

「楽に？」

「私……僕、将棋でなら、一人の人間として生きていけるかもと思ったんだ」

「……木田？」

膝が震える音が聞こえてくる。全身が震えているのかもしれない。少し、後悔している。まだ、楽しい食事は続けられたはずなのだ。

「ずっと、嫌だった。女として見られことが。女として期待されることが。……僕の心は、男だったから」

川崎の目が、細められた。それは、まん丸くなるのを抑えようとしたせいだろう。

心拍数が上がっている。人生で初めての、告白。

「ずっと、なのか」

「ずっと。生まれたときから」

抑えきれずに、目が丸くなっていた。

「だと思いこんでた」

「え」

ここからは、師匠にも樹にも話していないことだ。川崎によって気付かされたから、まず彼に打ち明けなければならない。

「信じたくないけど、そう思いこもうとしてたのかもしれないって……。嫌いな自分を押し込めるために、自分は男だってことにこだわり続けた。でも、女としての自分も……確実に、居る……」

すうっと、体から、そして心から何かが抜けていくのが分かった。重くへばりついていたものが、言葉にすることで少し軽くなっていくようだった。

「それを……そういうことを抱えながら、木田は生きてきたのか……」

「うん」

川崎の右手が、僕の頬を撫でた。拭き取られてから、涙を流していたのだと知った。

「苦しかったら」

「うん」

「将棋で……何か見つかったのか」

「見つかったこともあるし……なくしたものもあると思う」

川崎は近寄ってきて、僕のことを抱きしめた。落ち着くかと思ったけれど、顔が見えなくて不安が襲ってきた。

「……ごめん。でも、誰かがこうしてあげられたら、って思ったんだ。俺が女だったらよかったのかな……」

「そんなことはないよ……。だって……」

肩を掴んで、体を引き離した。すぐ目の前に、川崎の顔。

「好きだと思ったんだ」

それが、この感情に適切な言葉なのかどうかは、まだ確信は持てない。けれども僕は、友情とか共感とか、そんなんじゃない想いを抱いている。それを認めるのは、辛かった。けれども、自分をだまし続けるのは、もっと辛い。

「自分から逃げるために、僕は僕を追い込んでた……。川崎に勝ちたい、いつか追いつきたい、そうすれば男でも女でもなく、自分として認められるって思いこんでたけど……勘違いだったと思う。『男らしい自分』を作り上げて、女の自分に責任を全て押し付けてた……」

「木田……」

「……もし僕が女じゃなかったら、こんなに優しくしてくれないんじゃないかとか、今でもそんなこと考えてるよ。どうしていいのかわからない」

「それは、今から考えさせてほしいな。俺は木田の男の部分、今知ったんだから」

川崎は、目をそらさなかった。僕の心をじっと見つめていた。決して、冷静というわけではな

いだろう。それでも、精一杯の優しさで、僕の前に居続けてくれる。

「僕もまだ、わからないんだ」

「じゃあ、俺が見つかるよ」

流れると思って、涙を流した。止めるだけの努力は、無駄だと感じた。男だって、泣くだろう。女として泣いてたっていい。我慢する必要はない。

力強く、引き寄せられた。僕も、腕を回した。厚い壁が崩れ落ちていくのが分かった。僕は、ひたすらに泣いた。

「……ありが……とう……」

初めて、男でも女でもなく、自分自身を見つけた気がした。弱い。本当に弱い。それを押し込めて、将棋で強くなろうとした自分。人と関わるのが怖かった自分。寄り添いたい自分。

時が、闇を深くしていった。二人は、いつまでも離れなかった。

気が付くと、その局面は現れていた。

朝から、異様に落ち着いていた。それは心の平穏というよりも、状況に対する安心感をもたらしたものかもしれない。最近、女流が男性棋士に勝つこともそれほど珍しいことではなくなった。僕自身、これが三局目。強い相手には負けるし、弱い相手にはチャンスがある。そして今日は、チャンスだった。これまでの相手と違い、それほど勢いのない中堅の先生。過去に女流に負けた経験もあり、何がなんでも、という気合は感じられない。

実力以上のものは出せない。ただ、僕の実力は上がっている。そして、この形は川崎と研究した。どのような変化になっても、自信がある。

研究合戦を嫌う先輩たちがいるのも知っている。しかし今なら言える。それは、最低限の努力なのだ。僕のような女流棋士でも到達できるところに、来ようとしない人たちが悪いのだ。

冷たい時間が過ぎていく。どれだけ考えても、自分が悪いということに気が付いたのだろう。ここまでで考えるべきだったのだ。

固まっていた腕が、ゆっくりと盤上に伸びた。銀をかわす手。少しひねった受け方だったが、それも研究済みだ。僕が思いつき、川崎が深く検討してくれた。二分、待った。研究だけに頼ってはいけない。いつ研究から外れても、そのことが悟られないようにしなければならない。思いついた手を考慮したふりをして、僕は次の手を指した。

そこからは、お互いに長考はなかった。もう、考えて挽回できる局面ではなくなったのだ。「娘っ子が終盤で慌てる」のを待つことにしたのだろう。だが、僕はそこを乗り越えられる、と思った。

時間もたっぷりであったし、何より自信があった。想定していた局面からは、終盤のパターンも予測できた。

午後五時十三分。「負けました」の声。

驚くほど、いつもの対局と変わり映えのない感触だった。相手よりも強いから、勝てた。男性プロに初めて勝ったという感慨は、全く湧いてこなかった。ただ、これで次はもっと強い人と対

局できるという喜びは感じていた。

感想戦を終え控室に行くと、いくつかの祝福の言葉をもらった。どこかむずがゆかった。

終わってみれば、ただ一つ、予選一回戦が終わったにすぎない。僕にとっては意義のある初勝利だが、みんなにとってはそれほど意味のない対局だ。

メールを打った。電話をかけようかとも思ったが、そろそろ前夜祭の時間だ。

「勝った」

返事を待つようなことでもない。できる限り簡潔なものを送った。

川崎は今、二度目のタイトル戦を迎えている。これだけの短い期間でタイトルに絡めば、その強さは本物、一流の仲間入りだ。けれども、タイトルを獲らなければ、一番ではない。川崎は、一番を狙える逸材だ。

まだまだ遠い。それでも、届かない位置にいるとは思わなかった。川崎のことを知るにつけて、彼も大した人間じゃないな、と思うようになった。普通の人間が努力してあそこまで行けるのなら、希望もあるというものだ。

とにかく、正会員であるプロに勝つという一つの関門は突破した。奨励会にも入れなかった僕が、だ。そう思うと痛快な気分になってきた。

トイレに入り、豪快にナプキンを換えた。メールの着信音が鳴る。

「だろうね」

僕よりも、一文字だけ長い文章。そっけないが、わざわざ返信してくれたのは嬉しい。

頑張るとか、勝てよとか、送ろうと思ったけどやめた。そんなことは、昨日のうちに言っているからだ。

まだまだ続く対局。十秒将棋をする奨励会員。観戦記用のメモを取る記者。将棋界は、色々なものを原動力に動いている。僕も、その中にいる。今はただ、それを頼みにして、そのことを受け入れてやっていくしかない。

お腹がすいた。今夜は何となく検討陣に加わりたかったし、どこかに食事に行こうと思い会館を出た。少し歩いたところで、「ああ」と声をかけられた。向こうから、スーツ姿の中沢九段がやってくる。

「おめでとう」

「ありがとうございます」

それは、今まで見たことのないような笑顔だった。心から喜んでくれているのが分かって、照れた。

「いつか、編入試験を受けるといい。その実力が、あると思う」

僕の言葉を待たずに、中沢九段は歩き出した。僕は振り向き、その背中を眺めた。多少猫背ではあったが、とても大きかった。

男性プロ相手に一般棋戦で規定の成績を収めれば、アマも女流もプロ編入試験を受けることができる。まだ女流が挑んだことはない。そして、若手で最も正会員に近いのは自分だという自覚はある。

それでも。今は、急いでそこに到達したいとは思わなかった。結局のところ僕は、女性なのだ。その事実だけは、受け入れなければならないと思うようになった。僕が活躍する姿を見て、将棋を頑張る女の子もいる。それならばもう少し、せめて女流の中で圧倒的な存在になるまでは、このままで頑張っていきたい。

どこから聞きつけたのか、何件かのおめでとうメールが届いた。僕は足を止めて、全てを読んで、そして、笑った。今僕は、世界とつながっている。

思い直して、川崎宛にメールを送った。

「お前も絶対勝てよ！」

僕らはまだ、戦い始めたばかりだ。頂は、もっともっと先にある。

どこに食べに行こうか。体が行く先に、心を任せた。

## レイピアペンダント

<http://p.booklog.jp/book/18766>

著者：清水らくは

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rakuuha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/18766>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18766>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.